

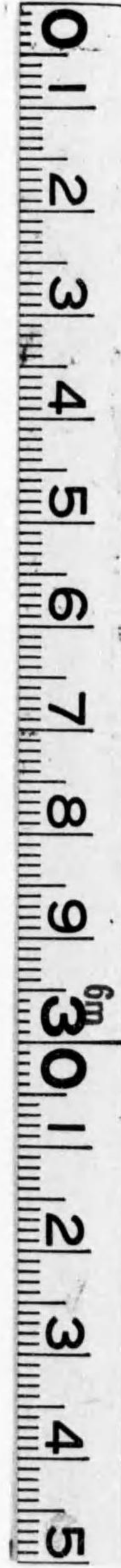
549

166

實驗

食用蛙飼養法

野々垣淳一著



始





野々垣淳一著

實用蛙飼養法

發行所 野々垣養蛙場

大正
15. 12. 21
寄贈

寄贈本

景全の所務事其の場本蛙養垣々野

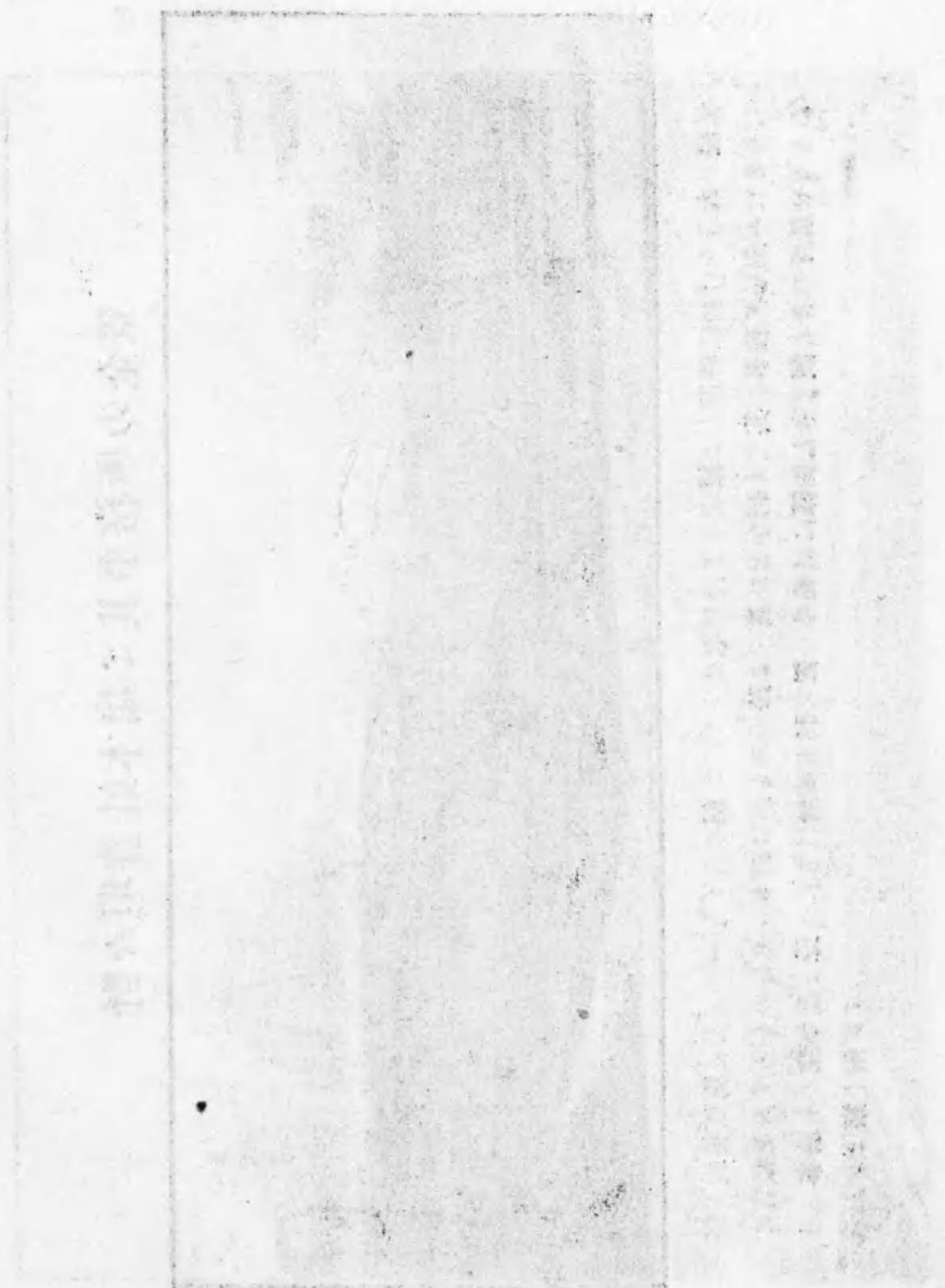


模規の大なるけ於に縣近くよ續成もき淺げ未日てしに製創の月十年一十正大に場蛙養垣々野
な所るたみ望を所務事其てえ越か場蛙養りよ路道の力南は圖本。りりものるす自を積貨と
あ方るせ疑訝の者え觀もきな保關に蛙養り。置と語を線無はるたへ登く高中望の所務事。り
す肥附し察。かんら



蛙卵孵化池

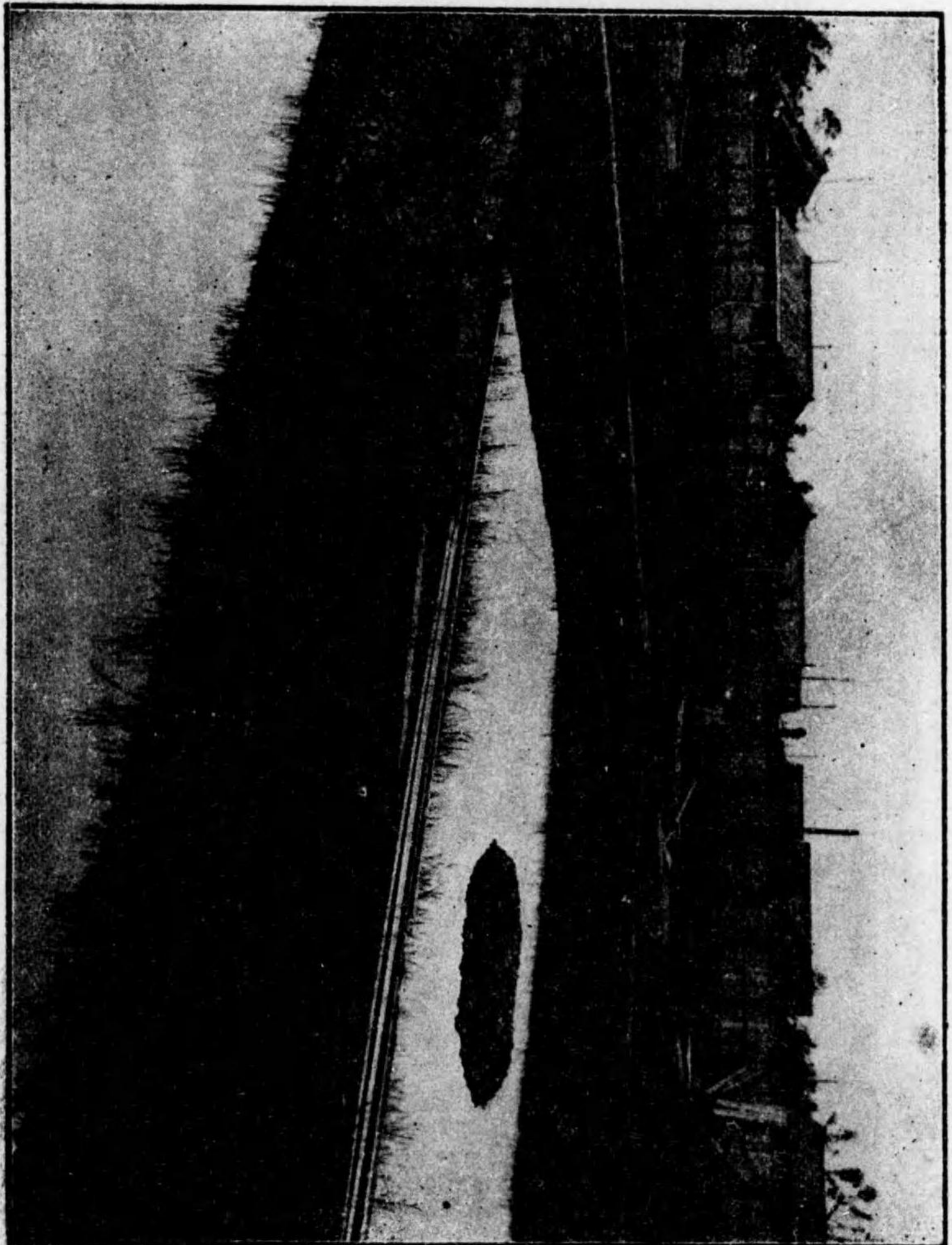
野々垣養蛙場に於ける蛙卵孵化池の一部にして低きは
 卯土製高きはコンクリート製なり



福永池の蛙卵孵化池



野々垣養蛙場第四池



野々垣養蛙場第四池

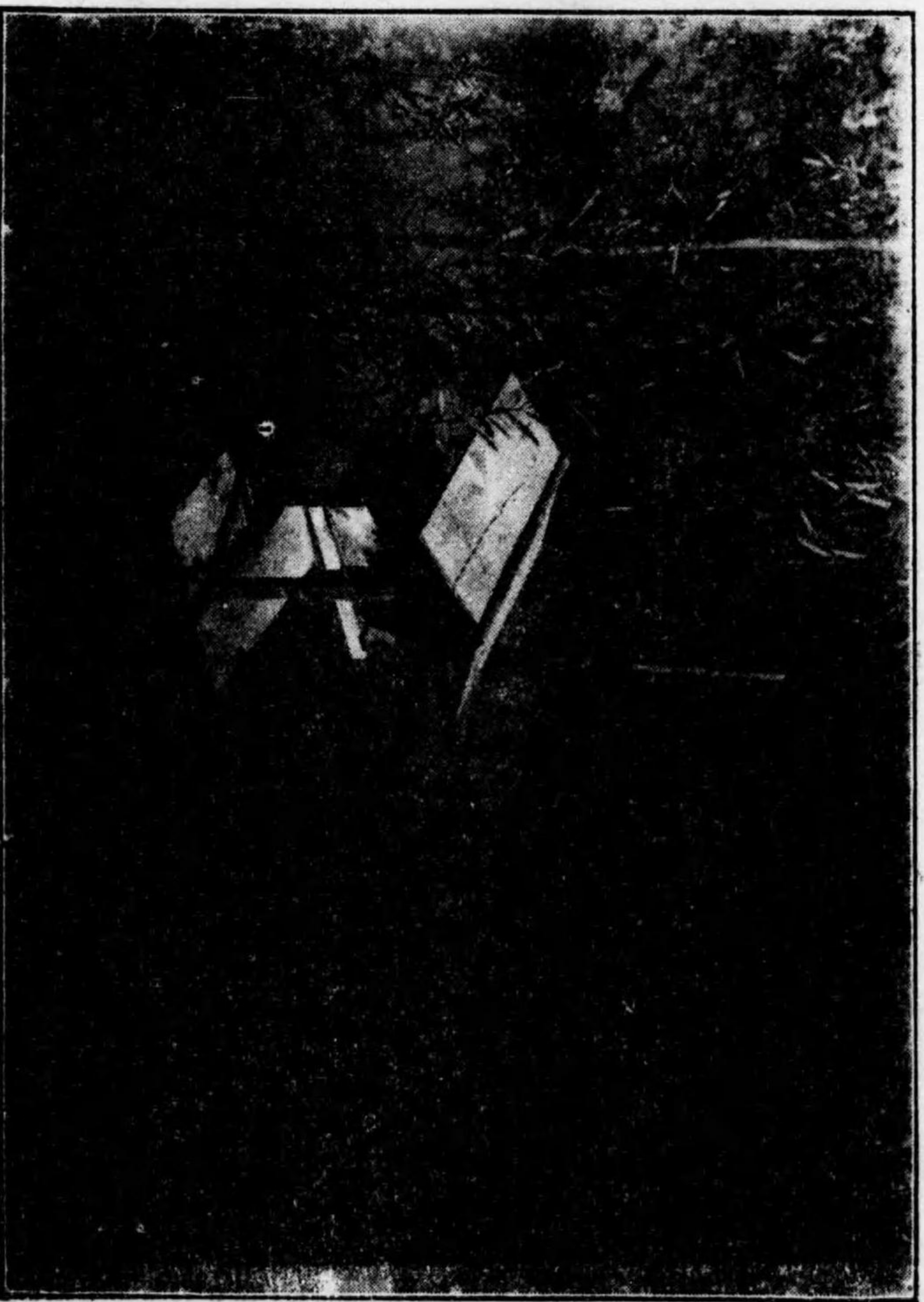
権内の一部にして同場内は十一區に區分されあり
目今は皆食用蛙各種の蟾蜍飼育池なり



野々垣養蛙場の一池内にて場内には楊柳、睡蓮、河骨

本葦、ガマ、イガサ其他種々の養蛙用植物を植へたり池

野々垣養蛙場の一池内にて場内には楊柳、睡蓮、河骨

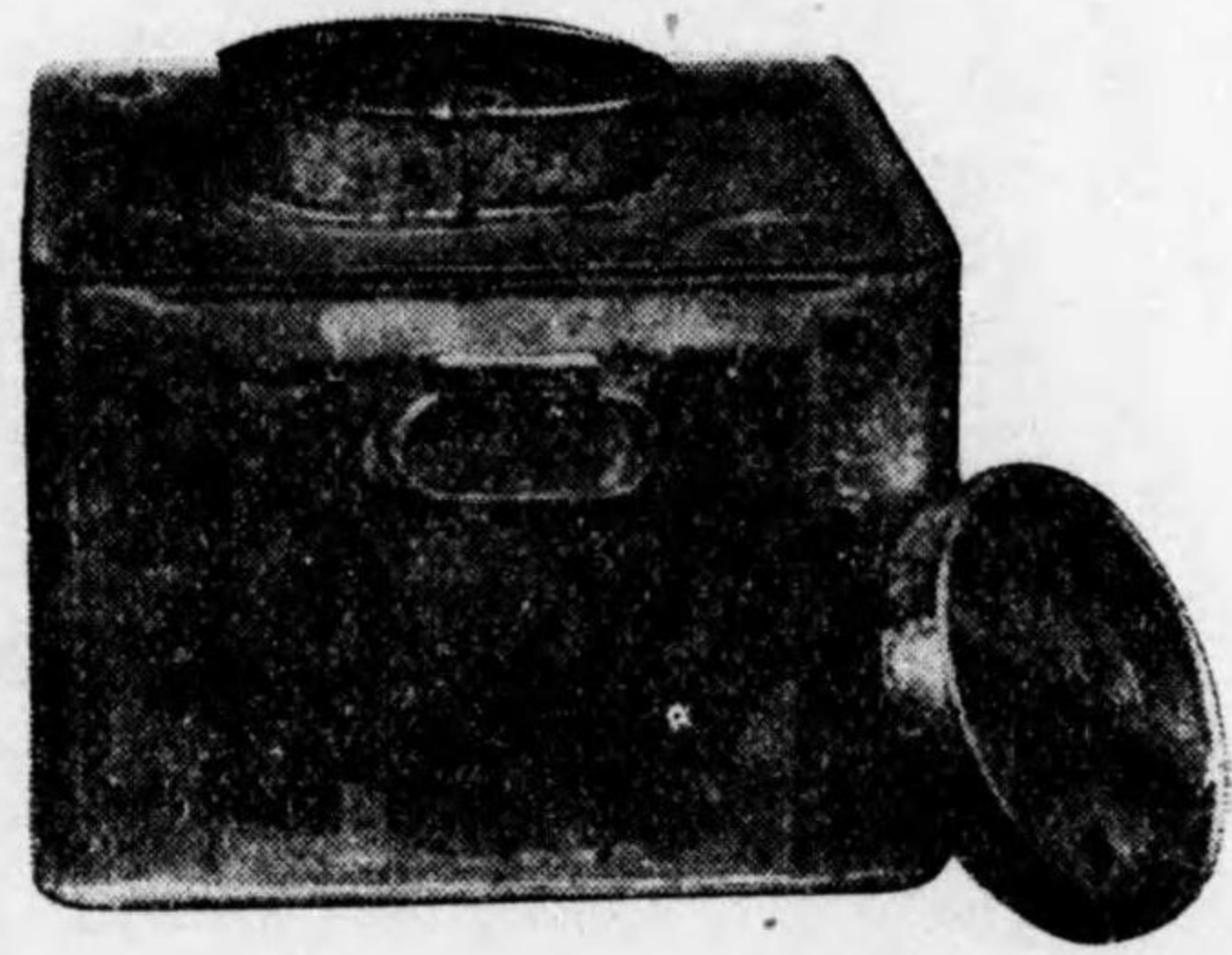


中の一端にあるものは野々垣式発虫用餌與器なり

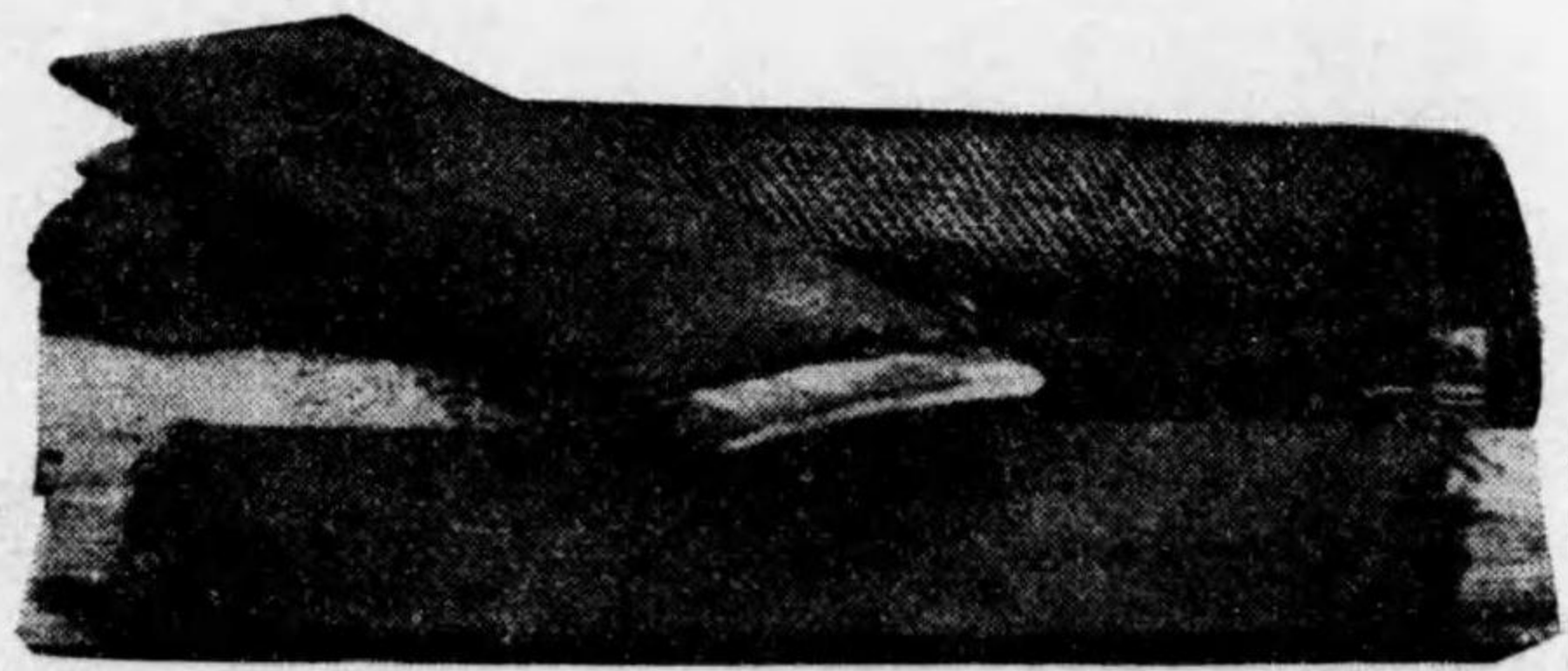
養蛙池の内部

食用水蛙の搬運器

石油罐を改造したるものにして全部鐵葉板製なれば重量軽く遠(數百哩)近を問はず蝌蚪を水と共に入れ運搬するに用ふ上部は口にして空氣穴を有する蓋(右方の丸形のもの)をなして用ふるものなり



食用水蛙の搬運器



蛙を詰めしせ有含水を分り張をゴンドに箱木のさ高の脊の蛙りなのもるな全安てし送輸ずは問を近(哩百數)遠ふ用てれ入



食用水蛙の搬運器

自序

近時諸新聞雜誌等の養蛙の有望なるを宣傳さるゝ哉、著者が養蛙を営みて居る事を知るの士は皆、食用蛙は如何なるものか、其利益、食ひ方、養ひ方、等一々詳述せよと書状を寄せらるゝ方が甚だ多い、然し多忙勝の著者には到底これに一々應答する譯には行かない、そこで止むなく拙い筆を走らせ簡易食用蛙養殖法なる一小書を作年中四回出したが何づれも忽ち皆發達し盡した、これ養蛙が益々有望視されて研究する者漸時多きを加へた證左であらう、然し前記の養殖法ではやゝ物足らぬ感を生じたので、大に筆を改め記事を補加し茲に又々應答書状の代りに筆を取り印刷せしめたものが本書である、されば前の食用蛙養殖法よりも記事が二倍半にもなつて居るので養蛙を試験せんとする方にはいさゝか参考になると思ふが何分本書は手取り早く養蛙の如何を説明したものであるから、極詳細に養蛙を研究せ様とするには別に著者が書いた「養蛙全書」に依られん事を願ふと同時に本書の不備の点を諒せられん事を。

大正十四年一月

著者識

増補訂正第五版自序

本書生れて僅一ヶ年に満たない間に養蛙を試験する者漸く多きを加へた、併しこれを指導し又は研究する資料の尠い我國の現今の状態でもあらうが、應答書狀に代へて書いた本書が少なからぬ參考資料になつた様で、特殊の學校及び試験場等より本書を送れとの書狀に遇ひ或は都市の書律より多數の送附を乞われ、一星霜を経たか經ぬに既に二、三、四版共發送し盡した、これ養蛙の我國に如何に重大視せらるゝかを察する事が出來やう、今や五版發行に臨み時勢は増訂の急務なるを要求するに至つたのである、故に食用蛙の品種、親蛙の産卵、蛙卵採收法、孵化法、孵化池及び蝌蚪飼養池、養蛙場築造法の一例、食用蛙の料理法、等の各章を増加し、且他の各章は尠なからぬ増補と訂正と數個の寫真版とを加へ斯業者の參考に資する事としたのである。

大正十五年四月

著 者 識

目 次

第一章 沿革……………	一
第二章 食用蛙の品種……………	五
第三章 食用蛙の性理……………	一六
第四章 養蛙の趣味……………	一九
第五章 養蛙の利益及損益計算……………	二一
第六章 親蛙の産卵……………	二六
第七章 蛙卵の採收法と孵化法……………	二八
第八章 孵化池及び蝌蚪飼養池……………	二九
第九章 蝌蚪の養育法と其食物……………	三一
第十章 成蛙の食物と飼養法……………	三四
第十一章 蛙の食量……………	三五
第十二章 飼養場及び築池法……………	三六

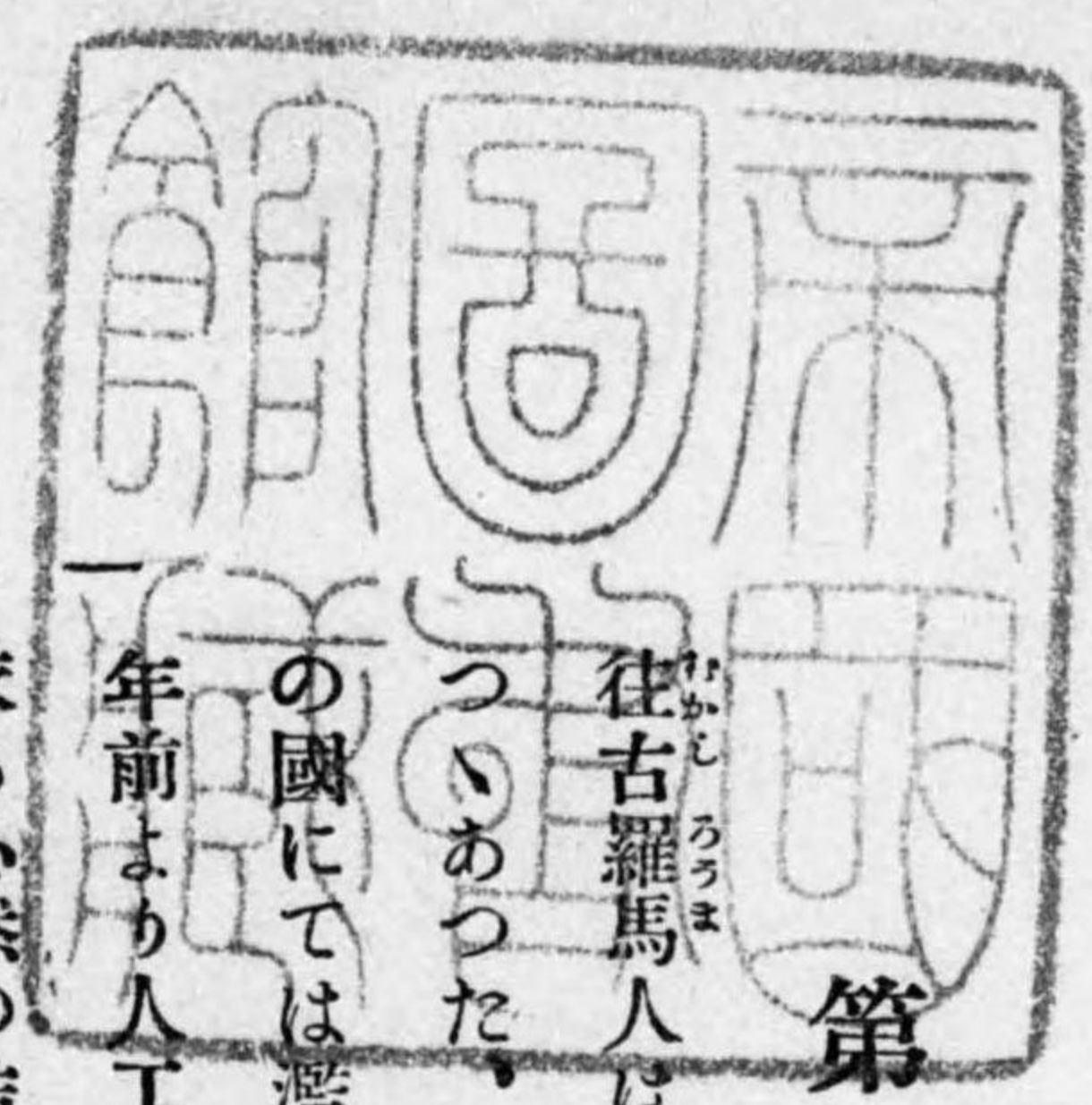
第十三章	養蛙場築造の一例	三八
第十四章	始業者の注意	四三
第十五章	放養数と池の面積	四八
第十六章	捕獲法	四九
第十七章	雌雄鑑別法	五〇
第十八章	蛙の越冬法	五四
第十九章	蛙の害敵	五五
第二十章	疾病及外傷とこれが療法	五七
第二十一章	蛙の需要と販賣法	六〇
第二十二章	食用蛙の料理法	六四
第二十三章	飼養法の詳細	六七

(目次終り)

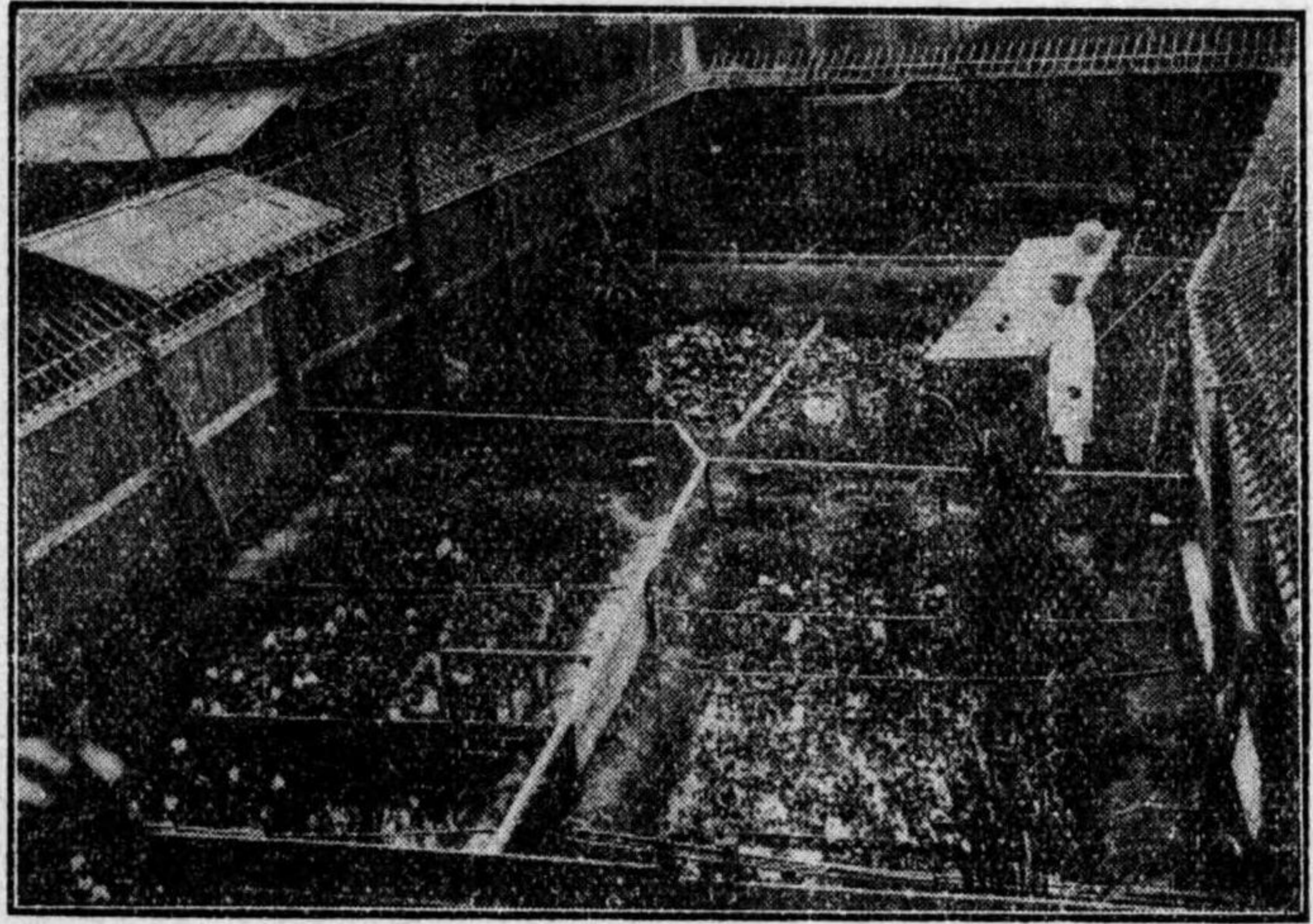
實用 食用蛙飼養法

野々垣淳一述

第一章 沿革



往古羅馬人は蛙肉を賞味して居たが、當時より佛國人は又これを嗜好し常食としつゝあつた。何分蛙肉は甚だ美味であるから順次、獨、英、米と擴まり。これ等の國にては濫獲の爲め野生蛙は年々減少し遂に家畜又は養魚の如く最近三十七八年前より人工により飼養さるゝに至つたものである。これ需要と供給との關係に依る心然の結果である。そして目下最も盛に養殖を爲すは佛國本場の外米國である支那では田鶏と稱へ専ら食用として居るが、彼の國では燕窠とて燕の窠を賞味する風習がある。勿論此燕は我國のものとは大に異り、住家には造窠せず海邊の



臺灣北廳食用蛙養殖試驗場

山岳又は人の余り行かない危険の處に窠を造るので、これを取るは中々容易の業でないから非常に高價なものであるが、其代り味又同國にては珍重がられて居るものである。蛙肉はこれと肩を比べ最も珍重がられ立派な料理のほか用ひられぬ事となつて居る。臺灣では支那の田鶏の言に對比して水鶏と稱へて又珍味とせられ、これ又濫獲され脅威を受けつゝある。臺灣總督府にては最近之に保護及び蕃殖を計るべく各廳に養殖試驗場を設けられた。内地では山梨、静岡、長野、新

潟等の各縣の山間部にては、美味の爲に附け焼又は煮て食用として居るが、其他の土地では専ら薬用とされて居る、即ち赤蛙は痔の薬、ヒキ蛙は梅毒及び肺病の薬、雨蛙は喘息の薬として食用として居る、其中赤蛙が最も美味であると稱へられて居る。

近年蛙の肉を好む外國人は蛙の罐詰を我國へ持ち來り食用として居る。これ我國は食用にする蛙種が居らないからである。従つて蛙の罐詰の輸入高漸次増加し年々六十万圓以上に至るも尙不足の次第であるから、京濱のホテル向の需用に應ずる爲め、止むを得ず静岡、神奈川の兩縣より殿様蛙(普通の田圃の蛙)及び赤蛙を生きたるまゝ、俵に詰めて供給して居る。又阪神地方のホテル並に外國船の需要に應ずる爲めに、大阪府附近の農家にて同じく殿様蛙赤蛙を取りて供給をなして居る。外國船は桶の中にて生かし航海中の食用とするのである。

晚近農商務省(今の農林省の前身)では豫てより常に農家の副業を撰擇せられて居

たが、蛙の需要右の如くであるから、これを農家に副業とし飼養せしめる事を着眼調査され其の結果有利な事が判明したので、食用蛙の飼養を勧められるに至つたのである。食用蛙の中ブル、フロツグ (Bull Frog) 種は大正七年四月東京帝國大學の教授理學博士渡瀬庄三郎氏が、米國より輸入研究せられて居たのが、七年九月に産卵蕃殖した其れを、大正九年に前述の次第で雌雄九疋の二歳蛙を譲り受け、其中茨城縣水産試験場へ雌三疋雄二疋。滋賀縣水産試験場へ雌二疋雄二疋に分ち養殖を托されたが幸に我國の氣候風土に適し、大正十一年夏茨城縣では一万二千滋賀縣では五万五千五十六の産卵を爲し、之が孵化成長したので同年十月下旬より各縣へ配布された、茲に於て全國に分布を爲し今日に至つたのである。著者は同農商務省(今の農林省)の御勸誘に率先應じ、大正十一年十月三十日愛知縣廳を経て同省よりブル、フロツグ種を譲り受けて飼養し又引續き他よりも同種を買ひ受け、尙他種をも各原産地から輸入して専ら之が養殖に力を注いで其筋の

主意に従ひ我國の副業の一にすべく努力して居るものである。

第二章 食用蛙の品種

蛙は動物學上 Salientia 目(跳ぶもの)の中に含まれて、其形扁壓された様な短い胴に廣大な口を備へ、短い前肢と長い展開する後肢とを有つて跳躍と游泳に適するものである、全世界中では二百余种程多く品種がある、我國では、殿様蛙、赤蛙、土蛙、青蛙、雨蛙、河鹿、蟾蜍等があるが何れも其形態小さく養殖に不便で、又食用に適當しないので藥用に食するのみ、只獨り蟾蜍は形は大きいが醜惡な形と刺激性の分泌物を有するのでこれ又食用に適當しない。これ我國民が蛙を昔から食わない原因でしやう、併し外國には大形で美味な蛙が種々至る處に棲息するので古來から食用せられ、又近時四五十年前より養殖の端緒を得其後三十七八年前より人工の養殖が始まつたものである、其主なる品種は左の如くである。

- 一、トノサマガヘル、學名を *Rana Esculenta* (即ち食用蛙の義) と稱へ歐州の大部アフリカの西北部亞細亞の大部に棲息するもので、本邦のトノサマガヘル或は金線蛙と稱へる蛙に比適するもので、これ等各地至る處の川沼田池に居る綠色褐色又は帶白色又は黃色等時に依り種々色澤等を變化させる、所謂、保護色を保つて居る蛙である。佛國や英國ではおれを盛に食用とする其都市のバリのみに於ても一ヶ年六千五百万疋も消費すると云ふ事である、何んと驚くべき巨數でありませんか。

一、トラガヘル、一名水鶏と稱へ臺灣初め印度南清地方に棲息して居る、體長約三寸五分位全長(後肢を伸したる時の總長さ)八九寸目方五六十位ある、色澤は薄黒色に黄色の虎毛模様の様な班紋が付て居るので、この名稱があるのでしよう、腹部は白色であるが不文明の暗色の班紋がある、これが東洋の巨大種で味殊に良く盛に食用とせられて居る、著者は大正十四年六月本種を輸入したが、長途

の運搬で生着後全部死亡した外何人も未だ輸入された事を聞かない。

一、田鶏 と支那で唱へ養殖して居る蛙がある、前記トラヘガルも田鶏の中であらうが、これと異り頭口の尖り少なく眼縁尖起し眼球の丸くて背面は褐色で數條の疣が列をなして居て、横腹面は褐色と黄色とで彩色せられて一見美なる蛙である。これは上海地方より香港及び印度地方に野生又は養殖せられて居り、最も盛に食卓上に登るもので其價は至つて高價なものである。大なるものは全長八九寸目方四五十位ある。余はこれを輸入して試験的に飼養して居るが水生的のもので殆んど陸上に在らないので、充分試験成績を書く事が出来ぬを遺憾とする。

一、ブル、フロッグ (*Bull frog*) は譯してブルとは牡牛フロッグとは蛙の事であり、牛蛙と云ふのである、おれは此種の蛙の鳴き聲は産地の米國人の耳には丁度牛の遠吠を聞く様な所から斯く名附けられたもので、我國人の耳には自動車の喇叭の音又は井戸ポンプの音の様に其聲が聞えるのである。食用蛙中の最大なもので



圖のグツロフ ルブ蛙用食

胴の長さ六寸足を伸ばした長さ一尺五
六寸重量二百匁を超ゆるものがある
北米合衆國の各地殊にロッキーマウン
に沿へる加奈太の東部に多く生産さ
れるものである。

性水中生活を營むもので陸上へは上
つて來る事は少ない、又成長すれば
神經鋭敏で親蛙に至れば人影を見れ
ば忽ち水中に入るから、吾人は之れ
を見る事は稀れである、幼時物に驚
く時はキューの叫聲を發して水中に
潜入もぐるするものである。我國の殿様蛙

と異つて脊中又は横腹上面に縞筋や皺がないものである、又皮膚は滑かで疣や皺
はない色澤は越冬中及び其前後は暗色であるが、夏期はオリーブ褐色又は鉄銹色
である、頭部は青味か、つて居るが後部は暗色である。又時には汚点又は他の色
彩を交へず黄綠色を呈する事がある、後肢は門狀に班綫あり下部は白色で不分明
の褐色の班點がある、雄は咽喉が黄味か、つた色を有つて居るが雌は黄色でない
充分成長した雌は目と耳と同大であるが、雄は目より耳は約二倍大であるから一
見し其れと知る事が出来る尤も幼時は雌雄共耳目同大である、産卵期は五月下旬
より九月中頃迄で産卵は夜間又は早朝に行われ三四日で孵化おたまじやくしし蝌蚪となる、蝌蚪
は甚だ長大で普通三寸五分乃至四寸五分位で、蝌蚪で最初の冬を越し翌春からだがかわる變態す
るものであるが時として一部は其年に變態するものもあり、又翌々年に至りて變
態するものもある、そして斯く久しく蝌蚪時代で居るものは其體大きく六七寸に
至り一見鯰の如く見ゆるものである。此種の充分成長したる蝌蚪は總体暗色で黒

色の斑點が判明に付いて居り尾には雌鶏の尾の羽毛の如き模様が付いて居るので我國の殿様蛙の蝌蚪と一見して區別する事が出来るものである。

本種は食用蛙として既述の通り我國へ最初に輸入され又農林省の力で最初に全國に分布された故に、食用蛙と申せば單に此種を指す有様となつて居て、體は食用蛙中最大であるが其肉他種の蛙肉よりも不味である。米人は云ふて居る。尙大正十四年夏著者及び著者の蛙友北島靖造氏も共に米國から輸入されて居る。

一、グリーン、フロッグ、又はスプリング、フロッグ (Green frog or Spring frog) は米國の東部及中部諸州、及び加奈太附近一帶に發見せらるるもので、胴及肢は頑丈で瘤々塊狀をなして後肢は割に短かく頭はスプリング、フロッグよりも更に圓い、體長は肢を除き約三寸位總長七八寸位である。耳は頗る大であるが雌雄に依つて異りて雌は小さいけれども、雄はブル、フロッグの様に目よりも至つて耳は大きい、皮壁は眼の後方より起つて耳から肩を経て短く分岐して居る、大腿骨と脛骨

とは長さ同じで指の蹼は四指の先端に達して居らない、色澤は頭より背部は暗色が、つた青色又は鮮綠色を帯びて居るが、臀部は同一色の黒味か、つた色合を現して居るものもあるが褐色と黄白色との班紋あるが普通である。下部は白色に多少の斑點がある咽喉部は黄色を呈して居る此種も性質は水棲であつて陸で捕へる事は稀で往々新らしい清水中で捕へらるゝが普通であると米國人は申して居る。性質又單獨の雌雄一對又は小群をなして棲息するもので大群をしない、水陸共に活動するものであるがヤカマシクない、偶々鼻音の鳴聲を發するのみである。物に驚いて水中に潜入するときは多く鋭い叫聲を出すものである、此蛙は春季他のものよりも早く越冬を了へ活動するものである。本種は我國へは著者が大正十四年九月に輸入したのみで未だ他の人が輸入した事は聞かない。

一、スプリング、フロッグ又はレオバルド、フロッグ (Spring frog or Leopard

frog) 北亞米利加の太西洋沿岸よりシエラ、ネバダ山脈に至る間又加奈太の

タバスカ湖より中央亞米利加のグアテマラに至る間に殊に東部諸州に多量に棲息する體長はグリーン、フロッグと同様約三寸位全長は七八寸位ある、色澤は通常鮮綠色に不定の暗色又は薄黃色で縁取られて居る、背部には日本の殿様蛙の様な不規則の列が二條ある又横腹にも一條又は二條ある背部の斑點は點又は棒狀で連續して居る、又眼より背中に至つて居る腺壁は黃色である、腹面は白色である、此蛙の蝌蚪もブル、フロッグと同様蝌蚪にて越冬経過すると云ふ、又此蛙はブル、フロッグ及びグリーン、フロッグよりも群集性であるから多數の養殖をなすに適當して居る、大正十一年神奈川縣が米國より輸入養殖したが同十三年九月一日震災で池堤が損じ逃去して其後影を止めぬと云ふ事である、著者も十四年七月五十疋を輸入したが何分長途の輸送の事とで全數の漸く二割しか生着しなかつた。猶其後死亡する者が頻々として起り、今や絶滅の有様で甚だ惜しい事である。

一、ウエスタン、フロッグ (Western frog) は北米のモンタナ以西ブジエツト、

サウンド、及び其以南南カリフォルニアに至る北西部諸州に分布して居る蛙で體長三寸内外である。色澤は頭部にありては鈍黃褐色(枯葉色)で横腹は暗色で背線との間は褐色の圓形の暗色の點があり、肢の外表面は横斷的に同じく薄暗色點を有するもので腹面は黃白色で不分明の褐色大理石色を現はして居る、此蛙はブル、フロッグの様に丈夫な扁壓された觀ある形態をなして居る、頭部の尖り少なくヤ圓形をなして居て幅が廣い、眼は小形で耳は眼よりも小形である、皮膚は厚く大腿骨は脛骨よりも短かく體長の半ばにも達せぬものである、指には完全な蹼を有して水泳は巧である。

一、ウエスタン、ブル、フロッグ (Western Bullfrog) は合衆國の西海岸地方に棲息するもので、色澤は夏期は多く背面は綠黃色で金色の反射をなして黑色の斑點をなして胴及び後肢の側面は赤橙色をなして居るが越冬中及び其前後は全体暗黒色である、其又前後は枯葉色若しくは銅色である、腹面は白色に鈍い黃綠色の散

點がある、頭は廣くて鋭角をなし前方は尖らず圓い、胴は扁壓状をなして伸長して肢は能く發達して長い、眼は適當の大きさであつて耳は眼よりも小形であるがウエスタン、フロツグの様に小くない、且雌雄に依り耳と目の大きさは異なつて居る、乃ち雄は目よりも耳は大きいが雌は耳目同大である。大腿骨は脛骨よりも短い其他はブル、フロツグによく似て居るが、性質はブルフロツグの様に神経鋭敏で物に驚き恐れる事は尠い、一例せばブル、フロツグは人影を見れば忽ち逃げ隠れるものであるが、本種は沈着し居て物に動せないから吾人の養殖に適し、漸時愛養者が増加すると云ふ事である。本種は著者が輸入したる外末だ我國へは輸入した人はない。

カリフォルニア、フロツク (California frog) は合衆國の西岸地方に棲息又は養殖せらるゝ蛙で其形態ブル、フロツグの様である (著者はブル、フロツグの一品種かとも考へる) 耳は目よりも雄によりては大きい、雌は目と耳と同大である

體は巨大で身長六寸全長一尺四寸重量二百匁にも達する、色澤は頭部濃綠色で臀部に至るに従ひ暗黒色であるが、時としては枯葉色又は光澤ある銅色を呈する、越冬期及び其前後は暗黒色である、又他の色澤を交へざる綠褐色を呈する事もあつて下部は白色に不文明の鈍黒色の斑紋がある、本種の肉は最も美味で性沈着にして物に驚き恐れる事がないので頗る養殖に適す、指には完全に良く發達したる蹼を有つて居て水泳は巧で水棲的の蛙である、本種は著者が大正十四年八月米國より輸入した外に我國に本種あるを聞かない。

- 一、サザン、ブル、フロツグ (Southern Bull frog) は合衆國のフロリダ、ミシシッピ、初め東部諸州に産せらるゝもので體長ブル、フロツグに次ぎて大きく身長五寸内外重量百四五十匁に達するもので、體色は背面上部黒味がかつた綠色を呈し下部は褐色であるが、時としては全体枯葉色に銅色の光澤を現したり、越冬前後は黒色であり腹面は白色である。

- あるものであるが多くは水温の寒暖で異なるものである、乃ち暖水は早く變態し冷水は遅く變態するものである。殊に久しく冷水の池にある時は翌年或は翌々年に至り兩肢が生ずるものである。然して從來鰓呼吸であつたものが肺呼吸と變じ次に尾は消失し茲に初て母体に似た體軀となる、之を變態と云ふ、此變態期には體に非常に異大なる變動を與ふるもので、所謂、危険時期とも稱すべく死亡するものが多いものである。其後は生きたる動物乃ちウンカ、蠅、各種の蛆、蛹、昆虫類、小魚等を食して成長するものである、卵より蛙に至る迄の順序は圖に示す通りである、食用蛙は種類多きが何づれも大形のもので我國の殿様蛙の如き小形のものでない、乃ち何づれも体長三寸以上全長(足を伸したる時の總長)八寸以上目方五十匁以上である、蝌蚪も長大で二寸五分以上五六寸に達して變態す其中ブルフロッグは最大のものである。充分成長したる牛蛙の蝌蚪は五六寸に達し、又成蛙は我國の蟾蜍よりも大きく体長五六寸、重量二百匁以上に達するものもある、

そして生命は非常に長く十二年乃至二十年である、乃ち蝌蚪時代が一ヶ年其後が成蛙時代である。食用蛙の肉は何種に依らず其色白く甚だ美味で且滋養に富で幼鶏肉又は鼈とちに似て居るので價又高價である。米國では鼈以上の高價でレストラン(洋食店)では一皿二弗位、乃ち我國の四圓乃至五圓位すると云ふこれ美味であるから高價であると云ふ事である。

第四章 養蛙の趣味

- 昔、小野道風は、柳の枝の先に居る小虫を捕食すべく蛙が幾度となく飛付き、且幾度となく失敗したが遂に不屈の働きは其目的を達した、のを見て年老ひたるにもかゝわらず弛す勤勉して遂に名高い人となられた事は、小學生徒も知つて居る通り、蛙は實に非常の忍耐力を有つて居るものである。
- 又食用蛙が靜止するときは動せざる泰山の如く、姿勢しせい一糸亂しちらんさす一時間二時間は

た三時間半日若くば一日間其まゝで居る事がある。あれ彼が身体と精神とを養ふ方法で、人ならば禪定三昧に入つた観がある、人間以外にかゝる静止禪定に入る動物が蛙の外に何物があるか。併し如斯静止して居て害敵に捕食さるゝかと思へば、否々決して然らず、自己危険なりと察せば忽然一跳躍池中の泥土中に身を没し身命を全くするもので、實に沈着と機敏とを兼たる者と賞賛せざるを得ない。彼が越冬に際しそれ迄に多くの食物を腹中に貯へ半歳間一食せず、池底に没し居るは勤勉、貯畜、衛生等大なる力を有つて居る。

夏期降雨前に鳴て之を報ずるは、氣象の法に通じて居る是皆人の知る處である。養蛙場を庭園式又は公園式に築造し彼れが一舉一動一止の状態を觀察するとき、或は炎暑の候の夕方、或は春雨の夜間彼れが鳴く聲を耳にするは、無量の趣味が湧出するものである。この味は養蛙者ならでは知れぬものである。

『古池や蛙飛び込む水の音』は芭蕉翁の名句だ否發句中の名句だ。これ何を語る

か意味深遠謂ふを得ず且説く能はざるも何んとなき雅味が満て居るではないか。前述の様に彼の動作は沈着、敏捷、勤勉、忍耐、衛生、先見等吾人の教訓となり實利方面の外に精神的の裨益を與ふる事は少なくない、のみならず大なる趣味がある。一度これを飼養せば最早廢止する事が出来ぬものである。

手を付いて歌申し上ぐる蛙かな

第五章 養蛙の利益及損益計算

養蛙の本場の佛國では『一人の養蛙者は十人の家族と、二十人の婢僕を養ひ得て尙若干の貯金が出来ると稱へられて居る（我國の中流の家庭では十人の家族を養ふには約二千圓、二十人の婢僕を養ふには給料も加はる事とて八千圓位要る、乃ち合計一万圓で尙幾らかの純利益として殘す事が出来る）と云ふ事である。又米國では『一エーカー（我國の四反）の濕地又は沼池で養蛙をすれば二十エーカー

二十四歩

(我國の八町一反)
六畝歩に當る)の畠に小麥又は玉蜀黍もちきびを栽培するよりも尙多額の利益を得べし」と稱へられて居る、乃ち米の作れぬ不良田の養蛙は良圃で小麥や玉蜀黍を作る二十倍以上の收穫があると云ふものである、其養蛙の利益は押して知るべきである、我國では養蛙は始めの業で今茲に何程の利益があるかと云ふ計算は示し難いが思ふに佛國や米國よりも尙大きい利益があると想像される。何故かと云へば米國や佛國では食用蛙は原野に幾程でも居るが、これを捕へて放任的に飼ふてさえ右の如き利益があるのであるが、我國では食用蛙は外國から輸入されたもので、従つて人が飼養する外野生は一疋も居らない理で、今日では數は至つて少ない、従つて外國に於ける利益が前述の様に多いのであるから養蛙を行つて見様とする人も非常に多いので親蛙、中蛙は申す迄もなく仔蛙こかへる蝌蚪迄も種蛙として此方面に大なる需要がある。されば佛米の様に親に成長させて賣らすとも蝌蚪及び仔蛙で忽ち賣り盡さるゝものであるので、米國や佛國の數倍の利益がある譯である。試に計算

すると彼の滋賀縣水産試験場は僅二番(雌雄四疋)の親蛙で大正十一年夏期には五万以上の蝌蚪を得られて居る、蝌蚪の相場は現今一疋五錢乃至五十錢である故に、五十錢宛として二万五千圓、又五錢宛として二千五百圓となる筈であるそれで飼養地は僅二十四坪である、又仔蛙は一疋一圓以上五圓、中蛙は十圓乃至二十圓、親蛙は三十圓乃至七八十圓の相場である。其利押しして知るべきである。又食用方面では鰻肉に似て滋養に甚だ富んで居るので、身体の虛弱症、肺病、病後の衰弱、其他肺結核症を有する諸病者等に用ひて著しい効があること鰻と同様である故に、米國では蛙と鰻とは同價であるそうである、著者の知人に養鰻者がある、其販賣價格は冬期は高く夏期は安いが生きたまゝのもので、卸賣値一貫目に付き日本産は五十圓前後であり、劣等の朝鮮滿州物でも二十圓乃至二十五圓である、故に百目日本物五圓鮮滿物二圓乃至二圓五十錢となるが、假りに其中央を取り百目三圓五十錢と低く見積る。次に牛蛙は大に成長した者は二百匁もあるが

150
3,000
1,150
20,500
15,000
5,000
5,000
45,000

之も扣へ目に見て一疋百五十目と假定し我國でも飛國と同様、籠と同價とすれば

一 一疋五圓貳拾五錢に相當する價値がある事となる次第である、そして親蛙に成長する迄は二年又は三年掛るが、蛙の養育地面積は一坪に付き蝌蚪は孵化直後の小形のもの、一万内外より三四寸の大形のものに至るとも三四百疋迄養ふ事が出来る。仔蛙は五六疋中蛙は二三十疋親蛙は十疋内外である、故に一反歩では三千疋の親蛙が得られこれを一疋五圓貳拾五錢宛で賣れるとすると一万五千七百五十圓の収入がある譯である。これは安い籠と同價に見積りたのであるが、一步譲り外國人向を本邦人向とし且始めの事であるから安く前記半價の代價としても約八千圓の収入がある筈である。尤も右は親蛙を有し子蛙又は蝌蚪を自家で産出させての計算である、そして右収入の内より飼養場の地料を初め餌料手間賃も要るが、これは僅少で問題にならない、乃ち蝌蚪より親蛙に至る三ヶ年の延べ地面積は蝌蚪一年の面積大に餘有に見積り一ヶ年十五坪仔蛙中蛙平均一ヶ年二百坪親蛙

一ヶ年三百坪合計約六百坪乃ち二反歩要るが、この二反歩の土地で一万五千七百五十圓取れるは他に何業があるか、恐らく養蛙の外にはあるまい。右二反歩の年貢米代は高く見積りても百圓位である、そして親蛙が無くて蝌蚪を買入れて行ふたとせば其蝌蚪代金は無論右収入金の内より仕拂ねばならぬ。親蛙三千疋を得る蝌蚪の数は二倍として六千疋三倍として九千疋である、多く見積りて一万疋以上は要るまい、蝌蚪一疋五錢とすれば五百圓、十錢とすれば千圓、二十錢としても只二千圓丈けである。尤も一反歩養池の設備に約四百圓位の資金は要るが、一度出金して置けば永年使用される筈、又餌量は蝌蚪時代には米糠、麥糠、蠶蛹粉、鮭肉粉等で五圓、蛙となれば誘蛾燈代二ヶ年で四五圓、他に蚯蚓及び蛆の發生用材料廿圓、合計七十圓内外(若し小魚を興へるにしても三四十圓要るのみである)費すのみで他に何物も要らない。残金は全部純利益となる譯である。右は食用向の値段で計算したのであるが現今の様な種蛙時代で種蛙として販賣すれば滿三年の親蛙は少なく共一疋二三十

圓以上に賣れるから、前記食用向の數倍の高價に賣れる譯であるから數倍の利益がある事となるのである。そして婦人子供でも行へる仕事のみで其手數は極めて少ないものである、乃ち殆んど要せない位である。

乃ち養鶏、蠶、牛、馬、豚、兔、等の如きは毎日時々殊に或る者にありては時間を定めて給餌せしむる必要がある。のみならず食量に過不足を生じては不可のものがあるが、養蛙は大に趣を異にし餌料は數日間分一度に與へ置いてよいし、又量の可不足に依りて失敗する様な事は萬々ないからその位素人にも容易に安全に養へる業は他に何一つもあるまい。

第六章 親蛙の産卵

春又は夏に至れば三年生以上の蛙は春情さかを催し鳴く様になる、續いて交尾期に至れば益々聲を高め鳴てく鳴き續ける、所謂、耳を聳せん計りである。この通常

の時より殊に高い聲でよく鳴き續ける事は取りも直さず産卵する時が來たので二三日中に産卵するものである。多數飼養する養蛙場では雌雄各池邊の各所を飛び廻り又は跳ね返り争闘が開始されるのであるが、其中體の強い雄が雌の背に負ばれ兩前肢で雌の腹を押すもので斯くする事數時間乃至數日に涉れば雌は臀部より放卵たまごをうむする此時雄は其卵に受精せしめつゝ、兩後肢で放卵塊を後方に押し遣る斯くする事漸時で全部の蛙卵は産下さるゝものである。放下たまごをかたまりされた卵塊は水分を含み急に膨脹ふくれして水面に浮かむものである。

ブル、フロッグの卵塊は大きく一尺五寸平方乃至二尺五寸平方位ある、そして一平方寸に四五十粒卵位あるものである、卵塊は水汀の部の水草に多少附着せしめて産卵する、おれは水底に沈まない様にする爲めである、産卵は夜間若しくは早朝に於て多く行はるゝもので、右産卵塊は白色の寒天様物質に包まれて水面に浮む故如何なる素人しろうとも一見して忽ちそれを知る事が出来るものである。

種蛙とする親蛙は少なく共四年生以上(六七年生が最もよい)で雌雄共體身肥大強健のものでなければならぬ。

第七章 蛙卵の採收法と孵化法

産下された蛙卵を其まゝ放置するときは、親蛙の爲めに卵塊を掻き乱され孵化せぬものを生じたり、又は卵塊及び孵化した幼虫を親蛙又は池中の害虫の爲めに食害さるゝものであるから、下に記する安全な孵化池に成る可く早く移さねばならないものである。

蛙卵を孵化池に移すには、直經一尺位のバケツ又は金盥かんだらい、或は洗面器せんめんき様のものので蛙卵塊を水と共に靜に掬ひ取りて、豫め用意して置いた孵化池に右掬ひ取つた扱を反對に靜かに行ふものである、卵を移すには一度に行ふ事は出来ないもので數回又は十數回前記の方法を行ひて蛙卵全部孵化池に移し入れるものである。

卵は何の手當を爲さず共日光及び水温で三四日中に孵化するものである、が産卵池の水温と孵化池の水温とが大に異るときは孵化せぬ事があるから、卵を移しかへるときは兩池水を水温計かんだんけいで計りて攝氏にて二度以上相違の無い事を認めた後移しかへるがよい、勿論移し代へた後に自然に水温の異なる事は差しつかへないものである。又蛙卵は寒天様物質に密集して居るときは死卵となり孵化率が尠いものであるから、箸様の細い棒で卵塊を廣げて成る丈け日光や水の當る様にして置くがよい。孵化池は深きに過ぎるときは水温低く孵化せぬ事があるものであるから此点大に氣を付けねばならぬ適當の深さは曲尺にて四五寸位である。

第八章 孵化池及び蝌蚪飼養池

孵化したる蛙の幼虫は水中の小さい各種の虫及び魚類等全部皆害敵がいてきで、これを等閑てそくにすれば孵化後何日を経ざるに皆食害さるゝものであるから、從來水のある古

池では不適當である、されば孵化にのぞみ又は産卵の一兩日前に新らしく田を掘り新らしい水を加へ新造するか、若しくは石灰を投じ從來發生して居る害敵の全部を殺して後新らしい水を注排させ石灰の氣を抜き有毒成分を除いて後にこの中に蛙卵塊を前章の方法で移し孵化させるがよい。

經費は要するが最も完全の孵化池は金魚を養ふ池又は養魚の孵化池の様な叩土池又はコンクリート池を使用の約二ヶ月前に造り置き豫め充分アクを抜きたる後井水を注入して一日乃至二日を経て蛙卵を移入するがよい。

叩土地又はコンクリート池を蛙卵孵化用に作るならば一産卵を入れるに適當のもの乃ち半坪乃至一坪位の面積で深さ一尺乃至一尺二寸位の池を數個造がるよい。孵化させるには水を四五寸位入て行ふがよい、其後の深さは七八寸に變るが良い。面積の大なる池を少く造るよりも面積の小さいものを數多く作るが便利である。叩土池は時に依り水を代へる事があるから成るべく水を排除するにも又注入する

にも便利に考へて造らねばならぬ事は勿論である。普通の泥池は水を時に依り注排させるに便利の様に注水口と排水口とを造り置くは必要で、此兩水口には金網を張り置き害虫の侵入と蝌蚪の逃出口を防がねばならぬ事は云ふ迄もない。尙孵化池には普通の殿様蛙や疣蛙其他の害敵が侵入して蝌蚪を喜んで食するものであるから、これを防ぐために池の四圍は高さ二尺以上の塀を土丹板又は木の板にて作り置かねばならぬ。

第九章 蝌蚪の養育法と其食物

蛙卵は水温の高低に依りて遅速ありて孵化するものである、攝氏二十五六度の水温では月の一日の朝に産卵したりとせば二日朝にはや、橢圓形となり、其夕方には完全の橢圓形となり三日の朝は長方形否三日月形となる、この時注意して見れば時々卵中の小虫は蠢動するものである。然して其夕方は既に孵化し初めるもの

で、其翌日は全部蛙の如きペラ／＼の形で孵化し寒天様物質に、或は池の汀の邊又は水草(叩土地なれば縁)に附着するもので時に依りペラ／＼と水中を遊泳するものである。其後は圓形の頭を生じ左右にかうがいと後部に尾を生じ、三四日を經てかうがいは消失して初めて蝌蚪の形となるものである。幼時は寒天様物質を食して成長する故何物も與へず共よい、寒天様物質の食い盡さるゝ頃になればアオミドロ、キンギヨモ、フサモ等を與へこれに附着する有機物を食して成長する其後は米糠をベタ／＼に煮たるもの又は水にて練りて與へる、其他大豆粕の粉末馬鈴薯又は甘薯を煮てツブしたるもの、豆腐トウフのカラ、うどん及び飯の殘物等を摺鉢にて磨りて與へる。其他胡瓜、南瓜、西瓜等の腐りたもの、又は腐らぬもの等殆んど食わぬ物はないから何物にても與へるがよい、著者は蝌蚪は水中の豚と思ふ何物でも柔かいものなれば食わぬものは殆んどないのである。動物飼料としては干魚肉の粉末、乾燥蠶蛹の粉末、等は大に好むものである、其他死魚肉たじし田螺を

叩き積したるもの、其他鳥獸肉等彼れが大に好むとあるから、飼養者は適宜の有り合せのものを投與あたらするがよい、丁度飼養法は金魚や幼鯉を養ふに異らない茲に注意すべきは食物の過多の爲に池を濁らしたり腐敗くささせない事が必要である。これ池水の溷濁にじりは幼虫を死亡せしむる恐れがあるからである、之を防ぐには常に池水を注排させるがよい。蝌蚪の小形のうち又は少數の蝌蚪は大なる蓮瓶手洗鉢等の中にも養ふ事が出来るものである。

蝌蚪が身長一寸五分以上に成長すれば叩土池のものなれば泥池に下すがよいこれは叩土池よりも泥池の方が肥大に早く成長するものであるからである。

小さい面積の池に多數を飼養するときは早く成長せぬものであるから、成長するにつれ順次放養數を減じ(養育池を増加する事)つゝ行ふが必要である。其度は實驗すれば容易に知る事が出来るものである。斯くて牛蛙ならば四寸位に成長すれば四肢を生じ續いて尾は消失し、所謂、成蛙かわるに變態するものである。

第十章 成蛙の食物と飼養法

34 — 蝌蚪が蛙と變態すれば生たる動物乃ち蠕虫及び小魚、昆虫類しか食はぬ者であれば面倒の様であるが飼蛙場の汀部又は出島の一端或は池の中央の島に夜間電燈を点じ昆虫類の誘致を計り置けばそれでよいもので何等手数を要せないが、又發蛆用餌與器と云ふ器具を汀部に備へ付け其中に魚肉及び臟腑類、又は蠶蛹を入れて置けば蛆は二三日で發生し同器の下部より自然に這い出で同器の浮板上に落ちるから蛙は好んど捕食する。又蚯蚓を池邊で發生せしめるもよい方法である。其他池中に糖蜜、蜂蜜の如き甘味のを小板の上のせて池上に浮かして置く時は昆虫類は之に集るから蛙は喜んで捕食するもので、飼養者は殆んど手数を要せず大に簡易に飼養出来るものである。又、蠶、同蝶、其他の蝶、蛾及びギス、バッタ、イナゴ、蜻蛉、小金ブンプ小魚類等を適宜に投與してもよいものである。又汀部に小魚投與器と云ふ金網張の箱の中に生きた小魚、小海老鮎等の如きものを

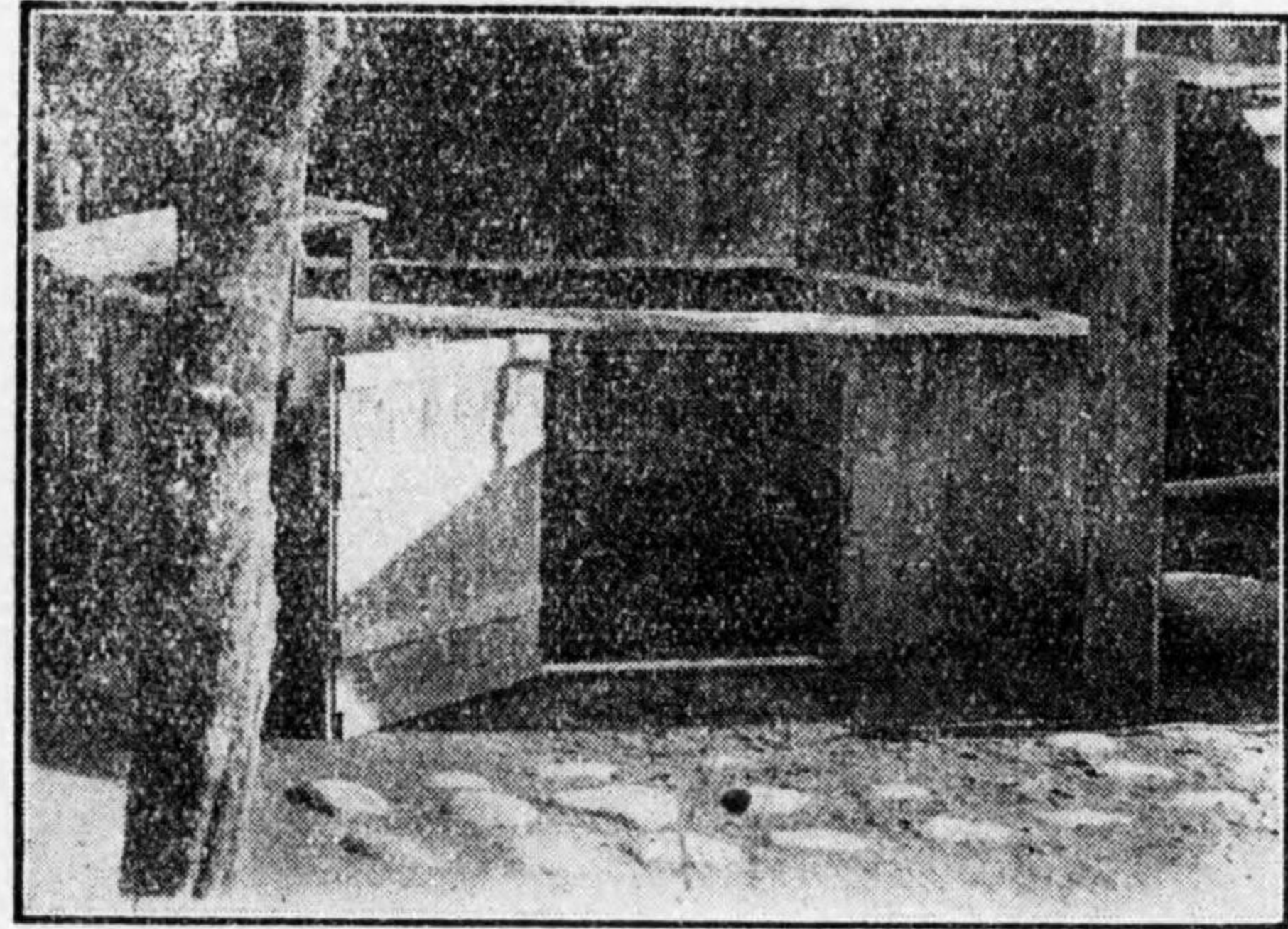
入れて池面に浮かしてこれを捕食させる方法をとるもよい。

第十一章 蛙の食量

養蛙業は他動物飼養の様に毎日食を與ふる必要はない。これ蝌蚪及び蛙は久しき間の飢餓に充分耐へ忍び得るものであり、又食物を與ふれば良く飽食するものである。又蛙は其攝食が不定時且不定量であつて一日も二日も食を取らぬ事があるが、又一日に幾度も食餌をする事があるものである。然して是等食の過不足に依りて身体を害するものでないから、飼養者は投餌の手数を省き得て安全に飼育する事が出来るものである。されど蛙を早く成長せしめ様とし又は養蛙の成績を充分擧ぐるには、成る可く多くの食料を常に飼育場内に入れて置き、彼が任意に多量を捕食するに便を與へて置くがよい。

第十二章 飼養場及築池法

蝌蚪は魚の如く水中のみで養ふものであるから、前述の如く叩土池又は田を掘り下げ水深は一尺位で總藻、金魚草、睡蓮を植へ、面積一坪乃至十坪位で充分であ



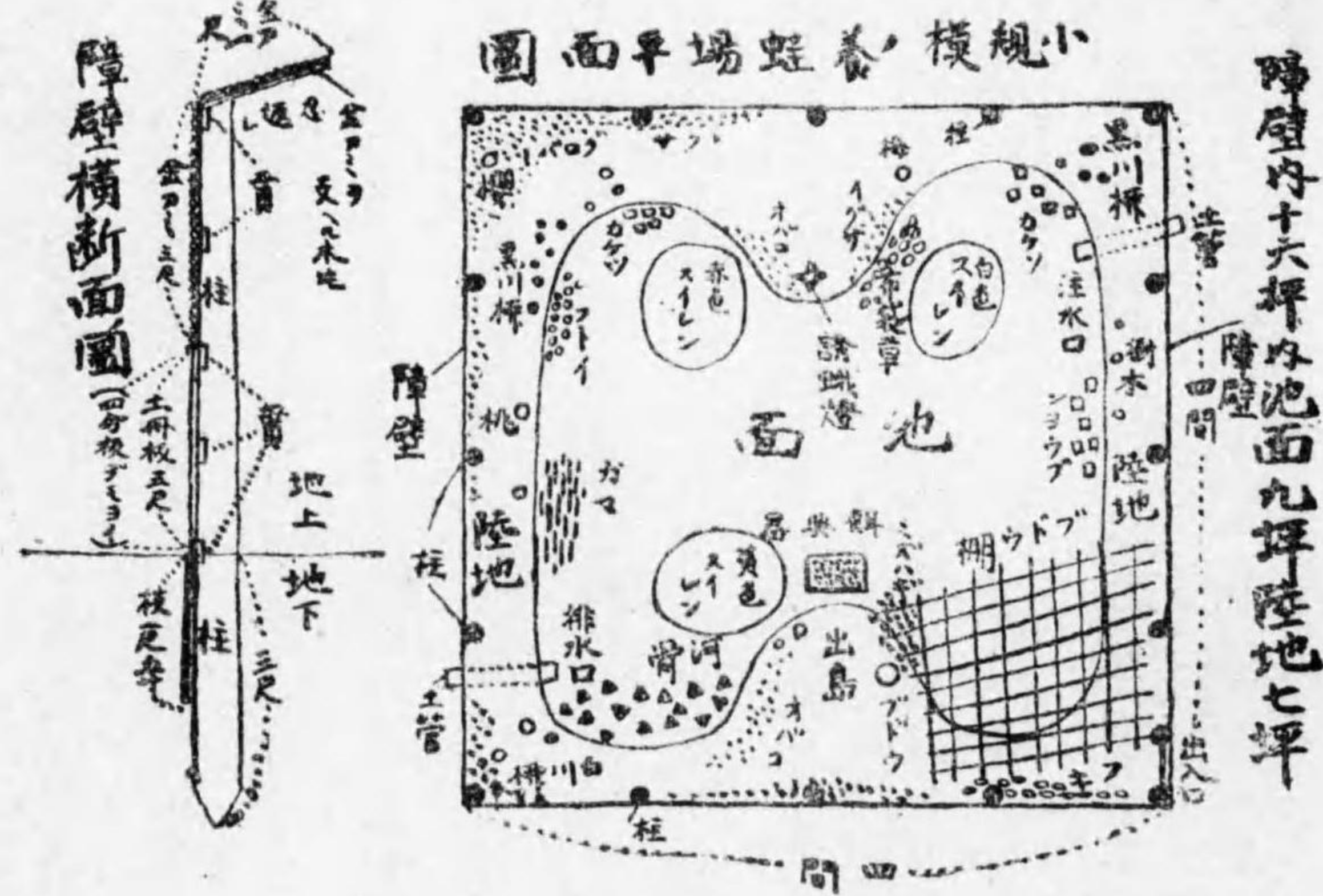
著者の養蛙場 此は養蛙場 著者の初
大正十一年十月旬宅内地に土堀
り築せしものにて面積に五坪に満たず

る其他蝌蚪の數に應じ面積を多くする成蛙は水陸兩棲類であるから飼養場内は水陸共に適宜あるが最もよい水深は二尺位池底は五寸乃至一尺を泥土として、彼れが潜伏及び越冬の便を計るがよい。池の四圍には巾三尺以上の陸地を作り蛙の休息と遊び場となす、其陸地の四圍には蛙の逃逸と害敵の侵入とを防ぐ爲め、板、竹、簀、若くば金網又は土丹板の類

で三尺以上六尺迄位の高さに塀を作る、塀の上部は何づれも必ず内方に向ひ忍び返しを附けて置かねばならぬ。忍び返しは蛙の逃去を絶対に豫防する爲である。又右塀の下部一尺位迄の深さに板を埋て蛙の脱出と、蛇、土鼠、等の害敵の侵入を防ぐがよい。池面には菖蒲、縞ガマ、杜若、フトイ、河骨、蓴、睡蓮、布袋草（此二種大必要）等の水草を、又陸地には白色黒色等の楊柳、行李柳、葡萄、梅、櫻班入フキ、大葉オホバコ、西洋蓴、イグサ、トクサ、其他の樹木を植へ、猶草生地として昆虫類の誘致を計り、天然食物の供給を計ると共に、幽邃閑雅の風致に富むと同時に蔭影を多くする。又飼蛙場に餘有の面積あれば出島を作る若し池の面積が大なれば中央に小島を作り前記の草木を植へ、蛙の休息場に當て其一端に誘蛾燈を装置して、蛙の食料たる昆虫の誘致を計りてやれば一層よいものである。大凡池の面積は多くを要しない極度い云へば裏庭にても飼養し得きものである。乃ち蛙の種類と飼養正數とに依りて異なるが柵内五六坪（池面二三坪）乃至十六坪（

池面九、十坪あれば充分成績よく養ふ事が出来るものである。此十六坪の池は比較的小さくて築地料も割安に出来上るものである、築造法は下圖の如くである、然し以上廣い程築地料の坪當り安く付き養蛙の成績が良いものである。米國では一養池は半エーカー乃至一エーカーの廣さである、尙池水は常に清く多少づゝ交換するが蛙及び蝌蚪の衛生上よいものである、溷濁する止水は有害である。されば池は小川の通ずる際に設け、おれより注水が出来る様土管又は太い竹の筒を埋設して置くと同時に、他の一方にも同様に土管又は竹筒を埋設して排水の出来得る様にして置くがよい。宅地内に深堀井戸を有する所に池を堀りて飼養するは水質清く且注排に便利であるのみでなく、冬は温かきものであれば蛙の越冬には最もよいものである。

第十三章 養蛙場築造の一例



小規模の養蛙場の設計圖

養蛙場の面積は廣い程一坪當りの經費が掛らぬものであれば就業する者は成る可く廣大に造るがよい、然し養蛙を試験的に飼養するには不適當であるから、茲には参考に四間四方乃ち十六坪の養蛙場を掲げ讀者の參考とする。築造法は前に記した通りであるが圖に依りて説明する事とする。

地の面積は九坪か十坪で中央に誘蛾燈と餌養器を置く場所は半島乃ち出島を造るがよいこれは多くの蛙に集

合し易くしたものである。池は汀部は浅く四五寸位で中央に至るに従ひ深く殊に
一坪乃至三坪位は水面より四尺位にする、この深くするは越冬や害敵の來襲ある
時蛙の逃げ隠れ場所に當てるのである、地中に睡蓮や河骨、班入太藺、縞ガマ、
其他の水草を植へるは昆虫類乃ち食物の來居と發生とを計ると、一方には彼れの
隠れ場所とする爲めである、睡蓮は昆虫類を誘致する力の強いのみでなく、蛙は
この葉の上に常に乗りて休息すると一方其葉の下が隠れ場所となり及び夜間眠る
に最も都合のよいものであり、冬期は根の下に越冬するに都合がよい、所謂、一
舉兩徳どころでなく、三徳四徳も利のある養蛙上には最良の植物である。

池の四圍は各二尺乃至三尺位陸地を設け是所にも陸上の植物を植へる何づれも昆
虫類を誘引する花の咲く木や草がよい、外觀のよい花の草木を用ふるは吾人の目
を喜ばする利がある、樹木の外は小さい草花を全部植て置くがよい、大葉オホバ
コは蛙の最も好むもので此草には小虫が多く來るもので養蛙上必要のものある。

大豆等も又小金虫が多く來るものでよい、葡萄は夏期炎暑の候適當の蔭影を興へ
涼しく越夏上有益であり、且朝夕は無数の小金虫が集る故自然養蛙場内に落ち彼
れが食膳を賑やすものである。尙養蛙者は朝夕葡萄棚を揺り動かし小金虫を点々
落下せしめ蛙に捕食せしむる方法を取るもよい。

汀の部は場内の廣狹に依りて板にて護岸を設け、池の浅くなるのを防ぐもよいが
岸の土が崩れる憂なくば設け置かぬともよい。

池水の注排水口は池の反對の方向に設け置くものであつて、注水口は池底淺く排
水口の邊は深く池を掘り置くがよい。

41
障壁は末口直徑二寸五分乃至三寸位の杉丸太又は檜丸太を柱として、一間毎に一
本宛か四尺毎に一本宛地下三尺埋め込み風害に耐へしめ、正味八分の厚さで二寸
巾長さ二間の杉材を貫として、五通りに各一尺五寸毎に柱に打ち付けて柱の上部
に厚さ一寸巾四寸位の板を打ち笠となし、地上三尺の間は土丹板か杉板を打ち其

42 一 下一尺乃至一尺五寸位地中へ八分板を埋め込み、蛙の逃去と蛇、土鼠の侵入を防ぐ物である。又土丹板と地中に埋没せる板とを一時に張るべく、長さ四尺五寸か四尺の板を地上高さ三尺の貫より下方へ地中迄全部一通りに使用するもよい方法である。右土丹板の上部より頂上へ三尺の間は蛙の大小に依り四五分目乃至一寸目で四尺巾の金網を柱に三尺を張り付け残り一尺は笠を越へて飼蛙場の内方へ一尺折り返し忍び返しを作る、此金網を支へるには厚さ六七分巾一寸位長さ一尺の木片を柱及び笠の下面に打ち付けて金網の末端を右木片に打ち付ける、此忍び返しは極必要のものである、これ蛙は時に依り金網を登りて障壁外に逃出する事があるも此忍び返しのある時は逃出する事は全然不可能のものであるからである右四間四方の池は貫が一本二間づゝのものを用ひば四十本土丹板は十六枚（木板ナレバ四束）土中に入れる板もそれ〴〵買入れるに便利である。又金網は巾四尺のものを百尺物一卷を購入せば過不足なしでよい、おの様に十六坪の池を作るに

は材料購入には至つて便利である従て比較的安價な造池費で落成させる事が出来るものである、此十六坪の諸材料は高價に見積りても五十圓内外である。

障壁の一端には開戸ひらきどの出入口を設け飼養主の出入を自由にして置く事は必要である、戸口は錠前を付け盗難及び悪戯わるいことを防ぐ事も必要であらう。尙廣大な池を作るにもこれを廣める事とすればよい又、數個の飼養池を作るならば右の池を連続させばよい、乃ち三個なれば一筋に三個を並べ、四個なれば田の字形に最初大なる一池を作り中切りを十字形にすればよい、又六個の池を作るならば中仕切をキの字形にすればよい。總べて中仕切りの障壁は高さ三尺又は四尺位の高さでよい、此場合の忍び返しは両面に蛙が居るから兩方に付け置く事が必要である。

第十四章 始業者の注意

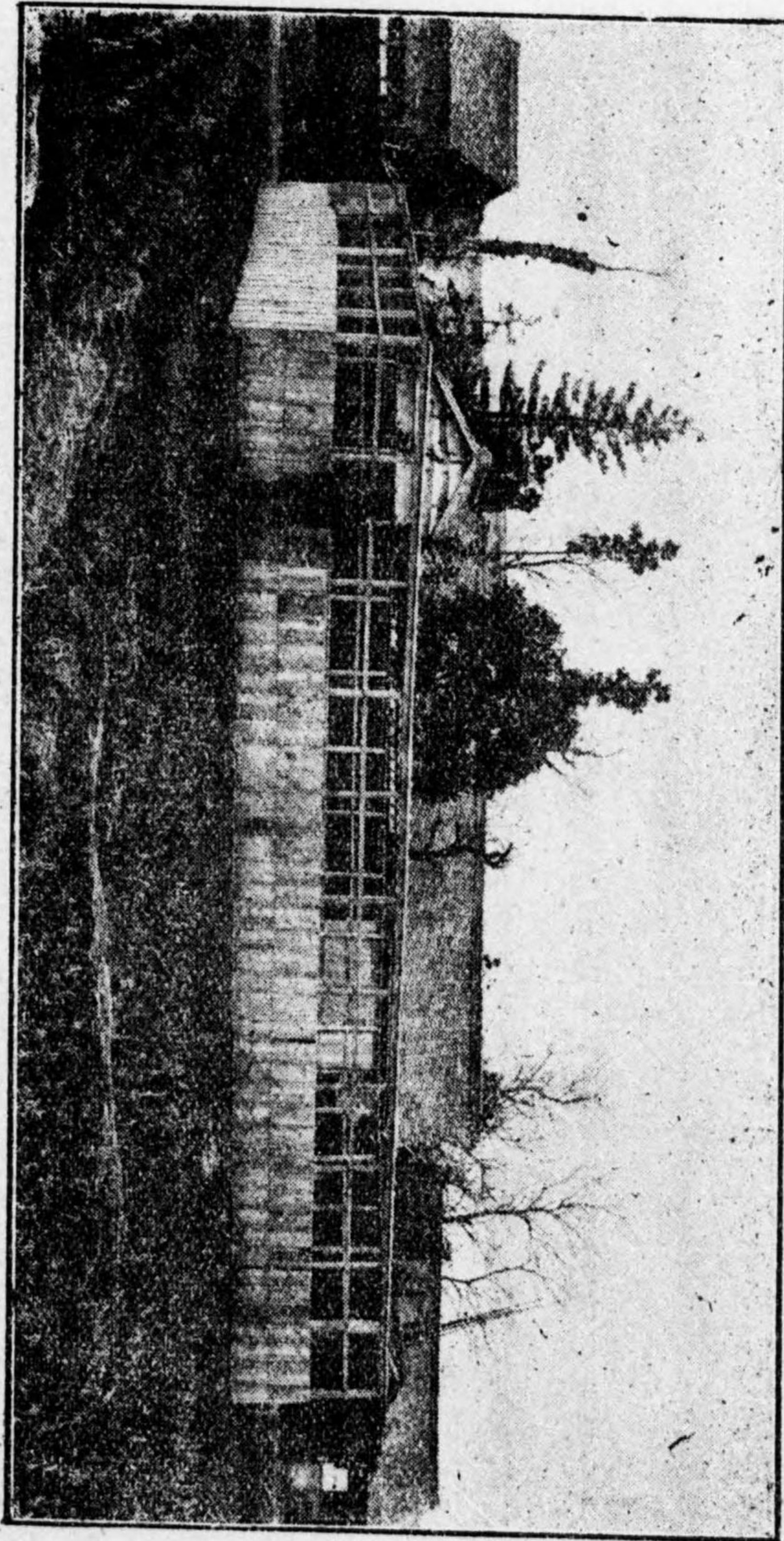
茲に特に諸者に注意し置く事がある、それは養蛙の失敗の点である、抑養蛙は動

物を飼ふ点より云へば家畜家禽の飼養さては養魚、養蠶等に比べて何より一番容易である、又手数も一番掛からない、又投餌も毎日遣るに及ばない二三日を一度に與へても又全々與へずとも、池の面積に比して放養数が尠なければそれでよいもので、殆ど六つかしい事はなくて失敗は殆どないものであるが、茲に養蛙には特に見落す事の出来ぬ失敗がある、それは蛙又は蝌蚪が飼育場より逃げ去ると云ふ一事である。何人も養蛙者は特に此点に意を用ひねばならぬ。

蝌蚪は注排口より逃げ出るものであるから蝌蚪の出でない蝌蚪よりも細かい目の金網を注排口に張り置けば事足るものである。尤も此金網は土丹織網ならば二三ヶ月で知らぬ間に腐り破れ蝌蚪が逸出し去るものであるから、時々新らしい金網と代へねばならぬ。銅線製なれば稍久しく保つのであるが、細い銅線製なればこれ又駄目である、されば太い銅線製網を用ふるが必要である。

成蛙も注排口から逃去をする者であるから、蝌蚪同様丈夫なる金網を用ひ逃去を

防ぐ事は云ふ迄もないが、成蛙は實に神變不思議の行動をなすもので尠しの障壁の空間あればこれより忍び出するものである、又忍び返しのないときは障壁を登



泉光の期冬場蛙養の種グロフルナ(二共)成蛙養の者著

り越へるものであるから充分此逃去には注意をせねばならない、養蛙の失敗は實に逃去の一点である事を常に忘れてはならぬと同時に充分綿密に障壁を完全に造られん事を力説して置くものである。次に蝌蚪及び成蛙を死亡せしむる点を研究せねばならぬ、おれが死亡の原因は飼養場が小面積に過ぎて水を春夏の候に腐敗せしむるのと、冬期水深が浅きに過ぎ越冬に不適當の爲めである。水の腐敗は水が常に注排せぬ点から起るものである、されば小面積の養蛙場ならば小川の邊に造池して水を常に注排させよいが、試験的に數坪の養蛙場を作る者は大底宅地内で穴を掘り單に水溜りを作る位で養蛙を試みるゝが爲め水の注排はせぬので自然池水が腐敗し失敗の原因となるのである。

池の面積が前記の九坪(障壁内十六坪)もあり又各種の水草を植へてあれば水は植物の爲めに同化作用をなして常に水は注排せず共清潔であるから成蛙や蝌蚪は死亡する事はないものである、されば著者は養蛙を試みる人には成る可く十六坪以

上廣い飼蛙場を造らるゝ様勸めるものである。

次に始めて養蛙をなさるゝならば、蝌蚪なれば池の面積の大小にかゝらず貳百疋、成蛙ならば一年生百疋、二年生五十疋、三年生二十疋、四年生雌雄四疋以下では養蛙の目的が充分達せられないものと察するから試験的にもおれ以上の多い數を以て始業されん事を勸め置くものである。

これ始めて行ふ人は經驗がない故幾分は失敗(養蛙の失敗は多くは逃去させる事である)すると定め置いて其失敗で減する數を豫期して最初から幾分多くの種蛙を求めて着手するが賢なるやり方であると察する。

— 47 —
尙前記の十六坪の養蛙場は始業する方には蝌蚪なれば五六百疋、一年生成蛙なれば三百疋(二年生二百疋、三年生百疋)四年生ならば五十疋位を飼養せられん事を附記して置くものである。

尙養蛙を行ふて失敗せずに一番早く成功を納めんと思ふならば、二三番の五六年

生の親蛙を最初に求めてこれに産卵させて行ふが一番よい、併し目下我國の養蛙状況より察すれば親蛙は數少なく容易に手に入れる事が出来難い点がある、されば三年生又は二年生のものを求めて數年後に産卵させて後大に行ふ方法もよい、彼の蝌蚪を求めて行ふがごときは長年月もかゝるし又蝌蚪及び仔蛙は害敵の爲めに殺られる事が多いに比し、親蛙は仔蛙時代の害敵は食料となり、反つて有要のものとなるの如き又親蛙に對する害敵と云ふ者は殆んどないから、これにて始業する者は失敗する事は殆んどないものである。

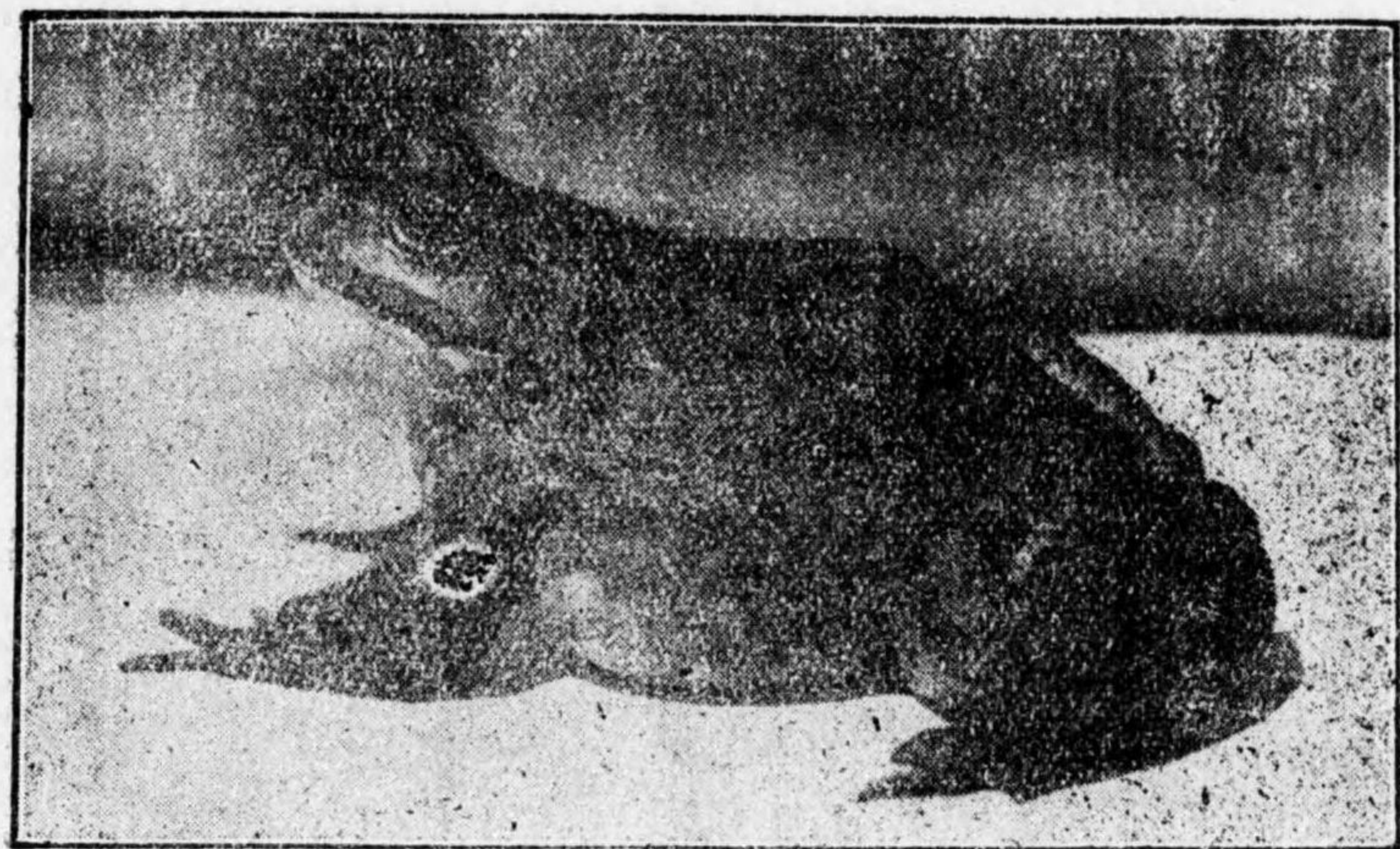
第十五章 放養數と池の面積

飼養する者の體の大小で一定せないが、蝌蚪は一坪に付き一万乃至三四百疋位である、乃ち孵化した計りのものは一万、以後成長するに従ひ飼養疋數を減じ變態する頃には三百疋位と心得るがよい。其後は成蛙の大小に依りて異なるが變態直後

は一坪に付き二百五十疋乃至三百疋以下成長するに従ひ數を減するが、其年は五六十疋に止め、同翌年は二三十疋、三四年生(親蛙)は十疋内外が普通である。尙これよりも多く放養する事も出来るが、余り多くの數を養ふは成長が後るゝから割に徳用でない。又これは食用向に飼養する蛙の一坪當りに對する數を記したものであるが種蛙用としての飼養數は少く共これの半數以下とするがよい。大小不同の体格の蛙を同一場内に飼養する事は避けねばならぬ、おれ大蛙は小蛙を捕食する憂があるからである。されば二三個乃至六七個の養蛙池を築造し置き大小に依り區別して飼養するがよい。市場に食用として賣り出すには滿二年間又は三年間養ふた大形のものでなければならぬ。

第十六章 捕獲法

蝌蚪でも小成蛙でも捕獲用の檻網(捕蝌蚪器、捕蛙器)で掬ひ取れば、捕獲は容易



蛙の雌雄の如く耳と目と大でるあ

- 體軀、骨格等に充分注意をすれば何づれもそれと察する事が出来るものである。
- 一、色澤の美なるものは雄、之に反するものは多くは雌である。
 - 一、體軀の細長いものは雄、丸形と肥太り居るは雌である。
 - 一、多くは雌に比し雄は總じて大なるものである。されど種類に依りて稀には之れ反するものもある。
 - 一、頭部の先端は雄は其どがり鋭いものであるが雌は之に反する。

であるが四五年の親蛙となれば高さ三尺長さ八九尺迄も飛躍する力を有つて、且敏活の逃方をするのであるから、網を張り置き追ひ積めて捕ふるか、又は夜間手提ランプを提げて彼の目をくらまして捕ふるものであるが、完全に池内全部の蛙を捕ふるには、池水を全部排除し且鱒を捕ふる如く泥土中を探り又は掻き堀りを行なして捕えねば完全には行かないものである。尙此際池中の草木根汀部の護岸の土と板との間及び汀部に草木葉根の繁茂して居るものあれば是にかくれ居るものであれば手にて探り捕獲するものである。猶此際陸地の草木の根本にも隠れ居るからは等蛙の隠れ場所の如きは充分注意し探らねばならないものである。尙蛙を捕ふるときは足にて蛙を踏み殺す事が往々あるからは又充分注意するがよい。

第十七章 雌雄鑑別法

蛙の雌雄は種類に依つて各点相異り見分け難いものであるが、左に列記する色澤

牛蛙の雄・雌は目より耳は斯の
如く約二倍も大きいのである



一、雄は前肢の腕太く殊に交尾期には親指は至つて太くなるものである、雌はこれに反する。

一、雄は叫囊があるが雌は無いものである、叫囊は口の基部に鳴かない時は縮み皮膚の皺の多くある様に見ゆるものである。

一、交尾期節に皮膚上にイボ形の突起物が出来るものは雄で、然らざるものは雌である。

一、雌は目と耳と同大であるが、雄は目よりも耳は至つて大なるものである、ブル、フロツグ。ウエスタン、ブル、フロツグ。グリーン、フロツグ等はこれに属するもので如何なる素人でも一見して知る事が出来るものである。併し我國の殿様かへる等は此耳目の大きさでは雌雄は見定めが付かぬものである。

前記の各点を相合し各種に對すれば大底判明するものであるが、無論幼蛙時代は判明せぬが普通である。

— 53 —
食用蛙の内近時流行のブル、フロツグは、雌は耳と目とが同大であるが、雄は目よりも耳が非常に大きいから、此一事のみで雌雄を識別する事が出来る、尤も小蛙や蝌蚪の中は何づれも耳目同大であるから、雌雄の判別は出来難いものであるが、變態後約一ヶ年以上も経ば此耳目の大きさは雌雄に依りて日を経るに従ひ自然

に大差を生ずるものである。

第十八章 蛙の越冬法

— 54 —

食用蛙は普通の蛙の様に陸上に穴を掘りて土中に潜伏して越冬するものと、池中の泥土中に潜伏して土中の温度により越冬するものとの二種ある。彼は十一月頃より前記の如く越冬するもので翌春三四月頃水上に浮み越冬を終るものである。其中寒氣に弱いものと強いものとあるが、多くは總じて其性非常に寒氣に強くブル、フロツグ。ウエスタン、ブル、フロツグの如きは何等の手當をなさでも池中の泥中にて充分越冬するものである（雪の解けつゝある寒池底に彼れが遊泳する事を間々見る事がある）が越冬前に多量に食料を與へ大に肥大壯健ならしめ且池底の泥土を柔かくなし、粗菜、板、薪の如き木材の類を池底に沈定せしめ、防寒の用をなしてやればおれ等の間に入りて越冬するもので一層よい結果を見るもの

である。又蝌蚪も成蛙と同様の方法でよいが、蝌蚪は成蛙に比して越冬力強く一寸位氷の張り居る寒池にても其池底に遊弋して居るを折々發見する位である。蝌蚪は何等の手當を施さず共全部越冬するものであるが、池底に藁を一束づゝ所々廣く沈め置くは彼に越冬力を更に増加させる良法である。

第十九章 蛙の害敵

食用蛙の蝌蚪及び成蛙は害敵が非常に多いものである、鷲、鳶、鳥、百舌鳥、魚豹、水獺、鼬、鼠、川鼠、蛇、鯉、鯰、鰻、その飼養する同種蛙及び蝌蚪より大なる蛙、等は何づれも害敵でこれ等は蝌蚪及び幼蛙を捕食するものであるから、

— 55 —

これが豫防と驅除とには充分注意をなさねばならぬ。

既に飼養場の所で述べた通り、飼養場の四圍に完全に障壁（塀）を作りて置いたものは大底これ等の外敵を防ぐ事が出來得るものであるが、蝌蚪や幼蛙時代は殊の

外害敵にかゝり易いものであるから特に注意すべく、鳥類を防ぐ爲に壁の上部に土丹引鐵線を縦横に張り置くか、漁網の様なもの張りに張りて彼れが侵入を防ぐが必要である。

尙蝌蚪時代は水中昆虫類(源五郎虫、水カマキリ、カエルバサミ)、水ムカゼ、ヤゴ、ひる、等は蝌蚪の血液を吸ひ死亡せしむるものであるから出來得る限り驅除せねばならぬ。殊に孵化した計りの蝌蚪を泥池に放養せばおれ等害敵の爲に全部食ひ盡さるゝ恐れがあるから、これを豫防する爲に叩土池若しくは蓮瓶等にて飼養し一寸五分以上に成長せしめて後泥池へ放養するが必要である。

尙蝌蚪時代は右の如く害敵は非常に多きも蛙となれば對抗力も強くなり、且自己以上の強者が來れば忽ち逃げ隠れるものであるから余程安全である。尙又五六十匁以上の成蛙となれば前記の水中昆虫類、鮎、モロコ、キリ、幼鯉、鰻、ドジョウ小鳥等を捕食するものである、されば蛙の幼時はこれ等は皆害敵であるが蛙が

成長せる時は反りて食物となるものである。面白い現象であるまいか。

第二十章 疾病及び外傷とこれが療法

蝌蚪や成蛙は疾病は殆んどないが然し稀れに病にかゝる事がある、又害敵にかゝり傷を受ける事があり、甚だしきはこれが爲め死亡するものもあるから、飼養者はこれ等を發見せば直に適當の所置を仕てやらねばならぬ。

蝌蚪の小さい時(一寸位)殊に秋より早春に掛けて最初は蝌蚪の尾端より漸時上方の腹部頭部と順次白色の微かびの様な細菌が發生する事がある、斯る蝌蚪は元氣無く日を経るに従ひ弱り身体細り遂に死亡するものである、此病氣は他の蝌蚪に傳染するものであるから早く治療させねばならぬ、其療法は未だ發見されて居ないから茲に書く事は出來難いが、著者の實驗に依れば池水を温くする爲に常に日光の當る様にする事及び清水を常に注排させる事等に依り軽い病は治せしむる事が出

來るし又豫防法にもなる、病の重いものには水一斗の中に食鹽しほ一握りひとにぎを入れ溶解とかししたる割合の水中にて飼養するときは治する様である、又池水にオーバコを投じ置くも効果がある様にも思わるゝ。

五六月生れで初冬の候に變態した仔蛙に限り時に依り頭部を黒く變色し續いて盲となりて、遂に死亡するものがある。これは夜間寒氣の爲めに霜に相ひたる結果である即ち霜傷である。既にこれにかゝつたものは治せしむる方法は未だ發見せないが豫防法としては池上に小板水草殊に布袋草(ウオーターヒヤシンス)の如きものを浮かさしめ、夜間冷氣の時は此下に頭を入れて霜害を免がるゝ様にすべしよき様である。

蛙が夏期炎暑の甚だしい時池水が沸きこれに當てられて死亡する者を生ずる事がある、此の時は蛙を捕へ早速魚籠の中に入れ其中にオーバコの葉を被ふ事數枚であつて籠の蓋をなして日蔭の涼しい處に置き、冷清水を少しづつ籠の上部より滴

々垂らかすか、清い冷水の流れ川があれば籠の底の部丈けを水中に入れて置く、斯くする事數時間乃至數日に至るときは回復するものである。又蛙が害敵の爲に傷を負ひたるもの又は飼養者が蛙を踏みて死に至らしめた時等には、オーバコの葉を清水に浸し蛙と共に魚籠に入れ冷靜な場所に置き時々清水を掛けてやるがよい。又傷の多大のものへはオーバコの葉を揉みて其汁を傷部に付けたり、又は蛙の口の中に流し込みたりするがよい。おれ等總て蛙が籠の中にて稍々元氣付きて來れば、不用蠶兒、イナゴ、バッタ、蚯蚓、ドジョウ、蝶、蛾、等の食物を入れ置き、これを捕食する様になりてから飼養池へ放養するものである。オーバコは路傍に散見するものを使用してもよいが、食用蛙の様な大形の蛙には普通のオ、バコの葉は小さくて使用上不便であるから、養蛙者は「大葉オ、バコ」を養蛙場の陸地(養蛙池の四邊の)内に栽培して置き必要に望みてこれを使用するが最も策を得たる方法である。大葉オ、バコは葉の長さ一尺以上幅四寸以上にも達するの

でブル、フロッグの様な大形の蛙にでも使用する事が出来るものである。

第二十一章 蛙の需要と販賣法

現今は食用蛙は種蛙として希望せるものが非常に多いから、蛙は云ふに及ばず蝌蚪迄も之の方面に大なる需要があるから、蝌蚪が成蛙に變体せぬ以前に何處の養蛙場も賣り切れる有様で蛙の販賣法には少しの苦心をも要しない、否、賣るよりも買ふ方がむつかしい時代である。

併し乍ら將來乃ち拾數年後には、全國には相當多くの食用蛙の繁殖を見るであろう。此際には食用向として外人用として都會のホテル、レストラン(旅館、洋食店)へ販賣するがよい、目下ではホテルやレストランでは食用蛙の需用は莫大であるが、食用蛙が只種蛙として愛飼され、食用方面への所謂潰^{つぶ}し向へ迄は中々廻り來ぬから、止むを得ず普通の蛙を捕へて内密に需要に應じて居る次第であらう。

るが、食用蛙は澤山出來たれば喜んで買入れて呉れるに極つて居る。ホテルやレストランでは之が客人に供給する様になれば、一年中蛙を無くならしめては不



東光の場殖養蛙種風各(三共)場蛙養の者著

西南より見たる所にして場内は廣大にして原種池四軒飯間蛙池二個及び蛙卵孵化池兼蝌蚪養育池十余個を有し設備完全日々參觀者多し

可ないから常に之が買入れをなさねばならぬ、故に養蛙者は常に之に提供せねばならぬ。何分食用とするのであるから其數量は計り知る事が出来ぬ次第である。故に一の洋食店や旅館へ一年間販賣方を契約するには少く共何萬と云ふ大量が要るから到底個人にては出来難いかも知れぬ。されば養蛙者は協會又は組合の如きものを作り、數個若しくは數十個の養蛙場が集まり蛙を常に提供する策を立てる事は必要であらうと思ふ、勿論此間に蛙の仲買又は問屋の様なものも自然に出来ると思ふが、之が出来れば賣る方も又買入れる方も大に便利である次第で、如何なる小養蛙者も又大養蛙者も之に依り容易に取引さるゝ譯である。現今ではかゝる多くの蛙が居らぬから仲買問屋はない、従つて少數のものを賣るには初めは少し取引がしぬくいかも知れぬ。されば著者は全國の養蛙者の爲にこの方面に營業所を設け、蛙を賣りたい人又買入れたい人、兩者共の希望を満たす方針で居る著者の養蛙場で種蛙を譲り受けた人には、成長の後には之が賣却方には無論盡す事

とするであるから、養蛙者は只蛙の成長肥大を計ればそれでよい譯で、販賣方には少しの苦心をも要せぬ次第である。

尙外國では氣候、風土の養蛙に適して居る方面では蛙肉の罐詰を作り、養蛙に適の土地の方面へ移出して之の地方の需要に應じて居る。されば我國でも罐詰を作り各地へ販賣してもよいが、蛙肉食國へ輸出するもよいと思ふが、未だくゝかゝる事をする時期でない、之等の業は今後幾十年かの後に營まるゝ事であらう。又蛙肉は甘いのみでなく非常に滋養に富みて居るので、虚弱者には藥的效果があるから、今後幾年の後には内地人の食料に盛大に用ひらるゝ様になるのは勿論である。これ内地人は古來から蛙肉を食ふ習慣でなから今日迄は食はなかつたが、否、食ふべき適當の蛙が我國には居らないので食はずに居たのであらう、併し今日飼養する蛙は食用蛙の事であるから自然食ふ様になるは勿論である。彼の従前牛馬豕等の如きは外人の食ふものとして内地人は少しも食はなかつた、又牛乳山

羊乳及びビール、ラムネ、サイダー等挙げれば限りがないが、これ等は皆外人の飲料として全々飲まなかつたが、年を経た今日では飲まぬ人は殆んどない様になつた例を見れば察するに難からぬ次第である。若し内地人が食用に用ひらるゝ様にならば、蛙肉販賣の組合の如きものは殆んど要らないで何程澤山でも左から右へ直ちに賣行くもので養蛙者萬々歳である。

第二十二章 食用蛙の料理法

食用蛙の肉は其色白く一見しても美味で上品である事は何人も察するに難からぬ處である。其味は至りて美味で他に比べるものがない、食わない人に之を筆紙や言辭で示す事は到底出来ないものである。併し強いて謂へば鱈肉や、幼鶏肉に似て居ると申したが宜しかろう、そして其肉は頗る營養に富み藥科的價値がある。蛙肉は四季中何時でも食用とする事が出来るが、一番美味なのは冬期で秋及び夏

はこれに次ぎ、そして春季は一番不味であるが、それでも幼鶏肉こはとりにくや鱈肉たらにくの比ではない、蛙を料理するには養蛙地にて捕へたるもの中適當のものを選び、殺して先づ小形のもの(身長三四寸位のものは後肢の指を小刀にて割き、皮の一端を左手に、指骨の一端を右手にて各強く持ちて力を入れて引き割けば自然皮は綺麗きれいにはがれるのである。身長五六寸の大形のものであれば兩後肢の付け根より腹を通して咽喉の邊に掛けて皮のみを小刀にて切り割き皮をはぐのである。蛙は肉と皮とは容易にはがれるものである。皮はなめして煙草入れ錢入等の如き小形の囊物かぶるものを製作する事が出来るから保存して置き適宜賣却するがよい。皮を去りてから續いて臓物を去り善く洗ひて、兩後肢の肉より全般に渡り小刀にて肉と骨とを區別する事は小鳥類を料理する通りである。肉の切り様は料理する目的に依り適宜の形と大小とに切り取るがよい。

我日本料理はヤ、小形(身長三四寸位)のものなれば皮を去りて後臓物を除き、骨

と肉とのみを金串にて刺して適宜の蜂蜜又は砂糖を加へた醤油を付けて焼きて皿に盛りて出すが最も美味である、此際生姜を蜂蜜又は砂糖に加へて焼くも人に依り好ましいものである。

又蜂蜜又は砂糖を少量加へた醤油にて普通の魚肉を煮る様にして食するもよい、又蛙肉を薄く細長く切りて刺味として出すもよい、此場合上等の醤油とワサビを下して共に出す事は云ふ迄もない。又蛙肉にホウレン草を付けて吸物として出すも甚だよいものである、蛙肉の吸物の身は甚だよいもので著者は吸物としてはこれ以上甘いものはないと思ふものである。次に洋食用の料理法は前記の如く料理したる蛙肉をバターでフライを作りて食膳に供するが一番よい、又クリーム肉汁でマリランドを作りて出せば甚だ珍味である、其他輕淡の油燻も亦佳味と云ふ事である。洋食の料理法はいろいろあるも我國民には適せぬ人があるから畧する事とするも、大凡蛙肉は魚肉と柔い獸肉との中間であると心得て適當の料理をすれ

ば充分美味な物が出来るであらう。

次に養蛙者は蛙を食ふにも又賣却するにも成年に對しない、小形のもの殺すは大に不利益であるから、これを適當の大きさ迄に成長せしめた後にせねばならぬ、又至りて大形のもの種蛙として残してこれに依り蕃殖を計るがよい、体格の肥大健康のものを殺すは大に不利益である。よれ種蛙の方面へ高價に賣行くものであるからである。食用とする蛙は成年に達したもののうちより肥大強健の種蛙に適當のものを除いた以下のものを用ふるものである。

第二十三章 飼養法の詳細

上來述べしところに依りて食用蛙の飼養法は如何なるものであるかは知得せられたであらうし、且又讀者は本書に依りて充分注意綿密に飼養せられたら養蛙は充分に出來得ると思ふが、元來本書は多くの人に手つ取り早く養蛙法の如何なるも

のかを知られたく説明したものであるから、肝要且重大の事は皆述べたが微細の事や全く必要でない事は自然省略したり、又或る事項は具体的に述べる事を省いて、ことさら小冊子にして置いたのであるから若し實際に確實に且早く安全に養蛙の好成績を納め様とする人及び詳細に養蛙を研究せやうとする人は、著者が別に書いた『養蛙全書』に依られん事を願ふと共に、本書を粗答に書いた罪を前述の理由で御断りして置くものである。

實 驗 食 用 蛙 養 飼 法 終 り

定 價 金 七 拾 錢

送 料 四 錢

大正十四年二月二十五日印刷
 大正十四年三月五日發行
 大正十四年五月一日再版發行
 大正十四年七月一日第三版發行
 大正十四年十二月十日第四版發行
 大正十五年五月一日增補訂正第五版發行
 大正十五年八月十日增補訂正第六版發行



◎注意 本書に著者の印章無きものは偽版とす

愛知縣中島郡奥町三百廿番戸

著作兼 發行者 野々垣 淳一

愛知縣中島郡起町大字三條二七

印刷所 株式會社 大 東 社

愛知縣中島郡起町大字三條二七

印刷者 鈴木 宗一

發 行 所

愛知縣中島郡奥町

野々垣養蛙場

振替 沼古屋二〇四八番

大 賣 捌 所

東京市京橋區南傳馬町二丁目三番地

有 誠 堂 書 店

振替 東京七〇一五九番

同

愛知縣中島郡奥町

養 蜂 界 社

振替 沼古屋二〇三一番

549
166

野々垣淳一著

養蛙全書

洋裝紙
上等紙
紙數三平余頁
寫眞版電氣版
凸版多數挿入

本邦唯一の大蛙養書出ず

食用蛙養殖の手續少く、勞力を要せず、婦女子小供にても行ふを得べく、且多くの資金を要せずして多大の利益と趣味の有るは世の既に定説ある處なり。農林省は近時衰頹せる農家及び水産業者の副業として養蛙を奨励するは是を裏書せしものと云はざるべからず、然りと雖も食用蛙の何たる哉、養殖法は如何すべき哉、如何して如何なる方面へ販賣すべき哉、又如何し調理し食卓上に供すべき哉等指導する機關無きは甚だ遺憾に耐へざるどころなり。著者之を憂ひ自己が實驗研究の上畜積せる養蛙に關する理論と方法等悉く惜氣も無く網羅公開されたる大文章にして養蛙上如何なる一小事項に至る迄徹底的に心府に銘すべく、一言一句明確なる字句を以て數百頁の全紙悉く充實せしめられたるは實に感歎激賞するの外なく、如何なる素人と雖も忽ち了解し知らず、手を打ち沛然養蛙に着手し成功し得べきは心然なり。殊に巻尾に附録として美聲を愛すべき河鹿(かじか蛙)の飼養法に至る迄詳述し、娯樂に供せられたるは用意周到甚だ至り盡し得て尙余りありと云ふを得べく、加ふるに多數の圖版の解説をして適確たらしめたるは錦上更に美花を添裝するの觀あり、實に本邦養蛙書中のオソソリツチにして眞に養蛙全書の名稱に反かず實に本邦養蛙史上の特筆すべき快著なり。養蛙に志あるもの及び養蛙者は勿論養蛙に關係なき者も、一讀以て此珍奇にして頗る有利なる養蛙上の新智識を得以て歐米各國に後れざらんとするも、我文明國民の義務たらず哉、豈何人も一讀せずして可なん哉

養蛙用器具。餌料。植物種苗分譲

分譲規定價格表あり 御入用の方は郵券 二錢相添へ申込あれ 送呈す

養蛙用器具

は初業者には如何なるものが入用なるか又如何に製造して良き哉器具は御依頼に依り製作し御届け申すべし、又養蛙用器具材料も器具と同様御入用のものを御送附申すべし

餌料

は養蛙上には余り必要なく乃ち成蛙は飼養池に電燈を点すれば飼料たる昆虫類はあれに集るを以て任意に捕食すべく又蝸螺は米ヌカ、麥ヌカ、馬鈴薯を煮て之れを押し潰して與ふれば可なるも、乾燥蠶蛹、乾燥魚肉等の如き動物餌料は之を買ひ得ざる土地あり故に是等の土地の方に便宜を計る可く分賣申すべし

養蛙場用植物

養蛙場内の池中又は陸地及び水邊等には便宜の草木を繁茂せしめ、誘致するものは一層其効多く且吾人養蛙者の人目を樂ますべき觀賞用植物を用ふるは心然の理なり、當場は是等植物御入用の方には便宜を呈すべく養蛙場に必要と認めるもの數十種を撰み分譲する事とせり

愛知縣中島郡奥町

野々垣養蛙場

振替口座名古屋二〇四八番
電話十二番。設信電略ノア

愛知縣中島郡奥町 野々垣養蛙場 振替電話名古屋番二〇四八番 電話略ノア

種蛙分讓

食用蛙飼養は多大の利益あると趣味の津々たる事は既に社界の定評あるところなり、農林省に於ては既に大正九年以來之れが普及を計るべく種蛙を養殖し之れが分布に力め居らるは故なきに非らず、我野々垣養蛙場は同省の御奨励に應じ四個の養蛙場拾數個の養蛙池を設け之れが専ら飼育に養殖を計り養蛙をなさんとする方には種蛙を分讓する事とせり。抑々種蛙は本邦にては其數未だ充分ならず従つて養蛙すべく種蛙を求めんとする者漸次續出するも是を求むるを得ず空しく指を食へ時日を送るのみの状態なり。當場は之等養蛙をなさんとする者に便を計るべく力の有らん限り種蛙を分讓すべし。

愛知縣中島郡奥町（私書函第一號）

野々垣養蛙場

振替口座名古屋二〇四八番
電話十二番。發信電略ノア

養蛙場設計

初業者にして養蛙場築造に際し方法不明の方あれば便宜設計の依頼に應ず希望者は希望池附近の地圖を添へて申込まるべし料金一件に付五圓とす又出張實地設計は別に内規あり御照會の事

549

166

終